九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

自治産業コロニー「クズバス」とリュトヘルス(3)：操業準備から新契約締結後の再出発まで

山内, 昭人
九州大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/7182144

出版情報：pp.1-43, 2024-06-14. Kyushu University
バージョン：
権利関係：

自治産業コロニー「クズバス」とリュトヘルス（3）
── 操業準備から新契約締結後の再出発まで ──

山 内　昭 人　（九州大学名誉教授）

はじめに
第 1 章　操業準備から開始へ
第 2 章　新契約に向けての交渉
第 3 章　締結された新契約
第 4 章　締結後の再出発
おわりに

は じ め に

本篇では，自治産業コロニー「クズバス」（АИК-К）が現地（西シベリアのケメロヴォ）で操業するための準備から開始へ，続いて新契約に向けての交渉とその 1922 年 12 月の締結，最後にその締結への現地の反応と АИК-К の再出発に至るまでの期間を取り扱う。その際，入植労働者の受け入れや操業開始などのために緊急に準備された経過を最初に概観しておくことは省かせてもらい [(1)]，管理運営上の問題に焦点を合わせて，どのような問題があったかを中心に論じていくことにする。

まず，現地責任者に最初に任命されたバイアー（J.H.　Beyer），続くヘイウッド（W.D. Haywood），最後のリュトヘルス（S.J.　Rutgers）がそれぞれ遭遇した諸問題を（後述のように史料的制約のため網羅的とは言えないが）取り上げる。その中で，三者間にも微妙な意見対立があったことが明らかにされる。

続いて，リュトヘルスら АИК-К 組織委員会（暫定経営委員会）委員がソヴェト政府機関である労働防衛会議（CTO），最高国民経済会議（BCHX），そして〔本篇から新たに登場する〕国家計画委員会（ゴスプラン〔Госплан〕）[(2)] と新契約へ向けて交渉した過程を

（1）　ガルキナやモレイの以下の書を参照されたい。Л.Ю. Галкина, *Автономная индустриальная колония «Кузбасс»*（Кемерово, n.d.［2011］）；J.P. Morray, *Project Kuzbas. American Workers in Siberia (1921-1926)*（New York, 1983）.

（2）　1921 年 2 月 22 日に創設され，ネップ期に入り政府の工業政策推進下で経済計画作成に積極的に関与しはじめ，1925 年以降 BCHX に協力して数次にわたり 5 カ年計画案を公

追っていく。その中で，どのような議論が戦わされ，どのような問題が論じられたのかを，直接交渉の場と АИК-К 組織委員会委員および訪露中のアメリカ組織委員会（AOC）委員が共同して交渉への対応のために協議した場を合わせて時系列で追っていく。そして 1921 年 10−11 月の最初の契約（第 1 篇，25）条件を改変して締結された新契約の内容を説明するとともに，特に変更点の問題を論じる。

最後に，現地における新契約への反応と，同時に実現した管理一元化による АИК-К の再出発の模様を見ておくことにする。

とは言え，本篇に関する第 1 次史料について，モスクワのロシア文書館史料の追加調査が目下できないため，十分に揃えられていないことを予め断らざるをえない。にもかかわらず，本篇ではリュトヘルスの「クズバス年譜」（第 1 篇，2-3），（本篇から利用されはじめる）「シベリアにおけるオランダ人の建設」(3) などの従来利用されてこなかった史料の活用があり，諸研究成果も踏まえた従来以上の追究がなされているものと考える。

ここで，依拠した諸研究のうちガルキナおよびモレイの書（上記）からの引用について予め触れておく。ガルキナの書は，既述したように（第 1 篇，3）注なしで全史ゆえに掘り下げた記述が多くないものの，そこにしか見当らない史実が記されており，それらを本篇では引用している。ただし，同書は言わば自主運営方式を当初めざしていた АИК-К を評価せず，それが中央集権的なロシア式管理システムに組み込まれるのを当然視する立場から解釈を下しがちであり（cf. 第 1 篇，28），それに引き寄せすぎるのでないかと推測される紹介については引用を控えた。モレイの書については，IWW の立場に引き寄せすぎる同様の記述が散見する（cf. 第 2 篇, 3）。また，ベルグ（S. Berg）書簡を利用したメリー・キャルヴァート（Mellie M. Calvert）の未刊原稿「クズバス・アメリカ組織委員会」（第 2 篇，2）に依拠した重要な記述があり，またガルキナが利用した未公表史料の一部をモレイも明らかに使っている箇所が散見するのだが，前者についてはきちんと史料紹介をしてもらいたかったし，後者については史料への言及がないのは残念だ。史実に反するか，あるいは正確とは言えない記述もあり，引用は慎重に取り扱った。

表していく。

(3) “Nederlanders bouwen in Siberië (1921-1927),” Archief S.J. Rutgers, Map 15, Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis (IISG), Amsterdam. このリュトヘルス編著の 195 頁に及ぶタイプ印刷原稿には，関係文書類，とりわけオランダ人関係者の数多くの書簡が再録されている。

第 1 章　操業準備から開始へ

АИК-К 創設に向けての具体的準備は，すでに最初の契約締結を待たずに АИК-К 発起人 5 名による 1921 年 10 月 3 日の打合会で始められていた。そこでは，1922 年 5 月 1 日までの半年間の 25 人分の予算案（ケメロヴォおよびナジェジンスク〔冶金〕工場の調査に関連する予備作業分を含む）を組むことが動議され，可決された。人員はケメロヴォに 17 人，ナジェジンスク工場に 8 人をそれぞれ配し，前者にバイアー，後者にベルグを各責任者としての委任状を得ることにした（第 2 篇, 4）。

バイアーへの委任状は 1921 年 11 月 16 日に CTO 議長レーニンが署名して出され，バイアーはクズネツク炭田（ケメロヴォ）の〔初代〕コロニー全権となる（第 2 篇，5）。1922 年 1 月，バイアーら 17 人から成るグループはケメロヴォに到着したが，技術職員も教育を受けた指導者も同伴していなかった。その上，半年前（1921 年夏）のリュトヘルスを団長とするウラル・クズネツク炭田調査団の一員となり，キャルヴァート（H.S. Calvert）の通訳を務めたあとシベリア革命委員会（シブレヴコム）の伐採事業を手伝うため現地に残っていたマスカルナス（Ch. Maskalunas）が，バイアーの通訳として期待されていたのだが，その冬チフスに罹り，死去した [(1)]。

そのような困難な状況下で，バイアーが委任状に記された職務（第 2 篇，5）を果たすことには無理があった。彼の本職は看板書きで，АИК-К のエンブレム（社印）の考案者であり，実務には不向きであったことは，彼と後任のヘイウッドとの間に生じた確執時に書き残された（言及済みの〔第 2 篇，5〕）文章で具体的に知ることができる。それは 1922 年 7 月末日かその直後にヘイウッドによって書かれたケメロヴォの全般的状況に関する「経営委員会のシャトフ（В.С. Шатов）と他の委員宛」報告書である。その前半部にはバイアーが書いた CTO 宛 7 月 30 日付辞任申出書が再録されており，両者の管理責任者としての活動および対立内容が当事者自身によって記されている。また，後半部にはヘイウッドの管理責任者としての具体的な行動の一端が記されている。以下，その長文に即して（内容は多岐にわたって込み入り，時間的経過は前後するが）抜粋・紹介していく [(2)]。

> 私〔ヘイウッド〕はノヴォニコラエフスクに到着して〔辞任申出書（下記）では「7 月 1 日に……シベリアに到着した」とある〕，様々な事務所と委員会を訪問し，サカ

---

(1)　マスカルナスはリトアニア出身で，1917 年にシアトルで IWW に入り，材木伐り出し飯場での労働組合活動でシアトルから追放された経歴を持っていた。H.S. Calvert, “The Kuzbas Story,” РГАСПИ, 515/1/4306/13, 28, 32, 41; Галкина, *АИК-К*, 42; 第 1 篇, 13.

(2)　“Report of Haywood’s Trip to Kemerovo, Siberia,” РГАСПИ, 515/1/4300/19-46; 515/1/4301/1-5. 後者は最初部分だけの “without maps” 版であり，いずれも判読困難な箇所が多い。

ロフ（Sacarov）とゴロヴィチ（Gorovich）と再会し，後者が前者の推薦でノヴォニコラエフスクでの АИК-К 代表として行動していた。〔しかし，彼らの組織は不熱心であった。〕続くシベリア石炭業トラスト（シブウーゴリ〔Сибуголь〕）の長であったアレイニコフ（Алейников）との会議で，あなた〔シャトフ〕が受け取った私の最初の書簡〔未詳〕の中で描かれた暗黙の合意の話に入った。今の私の意見では，彼はその合意を実行に移すつもりは決してなかったし，のちの展開は，彼が全くコロニーに共感していないことを証明した。

当地でバイアー，クラウゼ（Krause; バイアーの通訳），そしてザカロフ（Zakaroff）は，イングマン（Ingman）とシュタインハルト（B. Steinhardt; 化学技師）がモスクワに向けて発つ前に受け取った 250 億〔額が大きすぎるので，単位は金ルーブリではなく，ルーブリであろう。以下の億単位の額も同様〕で装備品を購入していた。バイアーやクラウゼがノヴォニコラエフスクの公開市場やバザールで購入する方法は，最も有利でも経済的でもなかったように思える。なぜならば，シブウーゴリや他の部門には買い付け代理人がいて，彼らを通して購入できるかもしれないし，また様々な種類の機械の大量の装備品を持っている外国貿易代表者たちを通して多くの必要装備品を確保できるだろう〔まずここにバイアーへの不満が漏らされている〕。

ケメロヴォに夜遅く到着した時 (3)，私には周囲の状態は好もしくなかったし，キャルヴァートがケメロヴォを〔ミシガン湖岸の鉄鋼の町を模して〕「小ゲァリー」（a Little Gary）と呼ぶ時，彼の想像力を極端に広げていたように思えた。入植者の中で起きている感情は，ほとんど理解できない。対立の感情はほとんど全くバイアーのまわりに集中しており，特に経営委員会委員がバールス（A. Baars）を技術責任者に任命した時にそうだった。バールス個人への深刻な脅しがあった。〔ヘイウッドは任命者をぼかしているが，1922 年 4 月 19 日に彼自身が署名している。バールスはバイアーの補佐役として任命され，（川幅 600m で流れの速い）トミ川両岸の波止場，水運，家屋などの建築物のための作業遂行が任された (4)。〕

〔1922 年〕7 月 16 日，ヘイウッドの組織に関する報告を聞くためにケメロヴォで開催された最初の〔全体〕会議の議事録をここに書き写す。

CTO から彼が受け取った委任状（コロニー事業に関する諸問題への全権委任）を読み上げることから始まった。

リュトヘルスはナジェジンスクにいて，ケメロヴォへは 3 ないし 4 週以内に来るだろう。来た時，彼はヘイウッドと全権を共有するだろう。

---

(3) ヘイウッドの到着日をガルキナは 6 月 10 日（Галкина, *АИК-К*, 50, 82），またモレイは 7 月 9 日（Morray, *Project Kuzbas*, 95）といずれも典拠なしに記しており，上記シベリア到着日（7 月 1 日）から推測して後者の可能性が高いように思える。

(4) Мандат, 19.IV.1922, in: Archief A. Baars, Map 208, IISG; Галкина, *АИК-К*, 27. リュトヘルスの後輩であるバールスの前半生の経歴については，以下を参照。山内昭人『第 3 インタナショナルへの道 ── コミンテルン創設とリュトヘルス ── 』（九州大学出版会, 2021）, 317.

バイアーは経営委員会委員としての彼の責務から解放された。このことは任務が積極的に変えられることを意味しないが，しかしながらこの〔解放の〕方向で行動が必要ならば，それは起こされるだろう。

今後は電報および書簡は，モスクワの経営委員会委員以外に出されるべきではない。誰も経営委員会の頭越しに行うべきではない。

9 名の〔資産〕目録委員会は，10 月 1 日までにケメロヴォ諸企業の全目録を作成するだろう。委員会の構成は，コロニーから 4 名，シブウーゴリから 4 名，そして共産主義者である議長 1 名は〔シベリア〕工業局（Сибпромбюро　ВСНХ）によって任命される。10 月 1 日までケメロヴォ諸企業の経営委員会は，3 名（コロニーから 1 名，現在の地区ロシア人管理者，そしてシブウーゴリによって選ばれる議長）から構成されるであろう。この 3 人委員会〔下記の 3 人評議会〕は，目録委員会の報告書が来る作業年度予算案とともに “V.S. & R.”〔BCHX?〕によって取り上げられるであろう 10 月 1 日まで，ケメロヴォの炭鉱および諸企業を共同で管理するであろう。

ナジェジンスク・プロジェクトの継続問題は，ヴァン・ホッフェン（W. van Hoffen; 元 US スティール社の製鋼技師）報告が提出されるまで未決定のままとなる。

経営委員会はバイアーを除いて固められた提案である。

ヘイウッドはニューヨークに資格のある石炭技師を送るように自ら打電したと言った。

〔以上，議事録より。以下，ヘイウッドの文章が続く。〕

バールスの解任と辞任。会議の翌朝，私〔ヘイウッド〕はバールスに諸指示を出すのをやめるように通告した。あとで私は，バールスがコロニーの一員であり，彼の〔蘭領インド現地人〕妻はコロニーの費用で生活している間，彼は石炭経営〔シブウーゴリのことか〕から給与を受けていることを知った。私はこのことに関して彼に尋ねた時，彼の返事はコロニーからの辞表であった[(5)]。

バイアーは，自らを経営委員会から追い出すロシアの委員会の行動は不法な手続きであると強く主張し，CTO へ宛てて以下の辞任〔申出書〕（ケメロヴォ，1922 年 7 月 30 日付；写しがレーニン，リュトヘルス，ヘイウッド，キャルヴァート，バーカー〔T. Barker〕，トム・マン〔T. Mann〕，ワトキンス〔N. Watkins〕に送られている）を提出した。

1921 年 11 月 16 日に私〔バイアー〕は CTO 議長レーニンの署名がある CTO からの委任状〔上記〕を受け取った。それは更新されており，未だ失効していない。私は最近作成された新たな合意においてもコロニー経営委員会の 1 委員として確認されており，正式に罷免されていない。

それゆえ，その委任に含まれる責務のあなた方の組織体からの正式な解任を私は要

---

(5)　早くも 1921 年 11 月に現地に来ていたバールスは，1927 年 1 月 1 日の АИК-К 清算まで技師としてとどまり，1926 年 8 月から同清算まで АИК-К ベルリン代表を務める。Archief A. Baars, Map 190（リュトヘルスによるバールスの 1927 年 3 月 23 日付職歴証明兼推薦状）. バールスは同清算後，まもなく АИК-К の職歴を秘することになる。

求する。以下がその理由である。

①露語を全く使えず,すべての業務を解説者と通訳を通じて処理しなければならず,それゆえ彼らの言いなりになり，致命的な誤りを犯しかねないので，私自身，その地位のための資格がないと感じる；②そのような重い責任を持った活動を続けるにはあまりに年を取っている（64 歳）；③しかしながら私の主な理由は，コロニーの業務を行う際に彼らによって追求された不規則な方法のせいで，私は公的な資格で今の経営と結びつけて考えられることを欲しないからであり,以下がそのいくつかの例である。

（i）〔以下の文章は不明確で，仮に意訳しており，「彼」はバイアーを指すのであろう。〕早くも〔1922 年〕2 月に組織委員会の若干の委員間で，コロニーの他の委員の解任に関して通信が続いていた。その〔解任に関わる〕彼は CTO から指名と全権委任状〔上記レーニン署名の委任状か〕を受け取っていたのだが，その写しを組織委員会の他の委員に伝達していなかった。そのため，彼が物わかりのよい返事をすることを不可能にした。

（ii）私は 11 月 16 日にケメロヴォへ〔行くことを〕命じられ，12 月 3 日に創始グループの労働者とともにケメロヴォへ向けてモスクワを発つ一方で，3 月 20 日までコロニーに関して何が起こっているのか知らぬままにさせられていた。

（iii）私は元の契約の 3 名の署名者のひとりだったが，他の 2 人の署名者〔リュトヘルスとヘイウッド〕は最近モスクワで会って，そのような行為が企図されていたことを私に知らせることなしに新たな合意に署名した。

（iv）リュトヘルスとヘイウッドの経営委員会 2 委員はシャトフとともに，「バイアーは АИК-К の経営委員会委員として解任され，彼が適任とされる仕事を与えられるべきである」との決議に署名した。

その決議を彼ら〔3 名〕は CTO 書記に持っていき，彼らの署名認証の上その組織体の証印を獲得した。そして最近 7 月 1 日にヘイウッドはコロニーのための仕事の組織者としての委任状を持ってシベリアへ到着した。その決議のコピーを彼はノヴォニコラエフスクで私〔バイアー〕に見せた（その時私はコロニーのための資材を購入するために出席し，来る入植者のための配給を交渉していた)。私は失効されておらず，CTO によって罷免されていない委任状を持って来ており，また私は経営委員会の 1 委員としてその組織体によって確認されている事実に彼の注意をうながした。彼は，CTO のシールが貼られた決議を私が露語を知らないまま，CTO による決議の確認として CTO 書記によって署名が認証されていることを私は誤ったであろうことに明らかに気づいていない，と返答した。彼はそれからケメロヴォに赴き，入植者の公開集会で上記決議を読み上げ，会議は私がもはやコロニーの経営〔委員会〕の 1 委員でないと宣言した。

上記行動が，私の委任は正式には決して罷免されておらず，さらに私は CTO によってコロニーの経営〔委員会〕の 1 委員として再確認されている事実にもかかわらず，彼らによって取られた。

以上のことは，告発として意図されていない。しかしながら万一 CTO が上述の声明を調査することを望むならば，私はいつでも喜んで署名に関する文書証拠と彼らの

証言を提出するつもりだ。私の責務からの正式な解放を待っている。

〔署名〕H.J. バイアー／ A-I-C-Kuzbas 経営〔委員会〕臨時委員。

〔以上，辞任申出書より。以下，ヘイウッドの文章が続く。〕

バイアーとバールスの問題が調停されたあと，構成員の態度は好転しはじめた。

私〔ヘイウッド〕の最初の仕事は……〔住居建築，農場，食糧・水供給，公衆衛生設備，化学工場（プラント）などに関する説明が長々と続く〕。

3 人評議会（Council of Three; Совет Трех）。

あなた〔シャトフ〕によって大いに推薦されてケメロヴォにやって来た同志イストミン（Estomin; Истомин）は，自らが CTO の諸準備を実行に移すための努力においてシブウーゴリによって不利な地位に立たされていることを私〔ヘイウッド〕が具体的に示すことを指令として伝えた。私はまた，イストミン，アンギエヴィチ（Ангиевич），そして私自身が出席して開かれた 2 つの会議議事録を〔以下に〕具体的に示す。……

「炭鉱北部グループへ。1922 年 7 月 27 日 (6)。

CTO の指令によって炭鉱北部グループ管理者〔イストミン〕，アメリカ・コロニー代表〔ヘイウッド〕，そしてシブウーゴリ代表〔アンギエヴィチ〕から成る 3 人評議会が組織されている。

3 人評議会の権利と義務は，以下の指示のようにある。／……

1．3 人評議会の監督下に置かれるのは，CTO のアメリカ人労働者組織グループとの契約によってアメリカ人労働者集団に引き渡される予定のそれらの企業，つまりケメロヴォの炭鉱と化学工場（プラント）だけである。

2．〔炭鉱〕北部グループの他のすべての企業は，3 人評議会の監督下ではなく，以前のように経営される。／ 3．……

4．管理機能を実現するために，3 人評議会は以下の権利を持つ：

a）炭鉱経営のために，ある程度の問題を軽減するのに必要なあらゆる種類の情報を要求する権利

b）同様に調査目的のために，あらゆる作業現場などに自由に立ち入る権利

5．……／ 6．……

シブウーゴリおよび 3 人評議会の代表には，同志イストミンが任命される〔が，まもなく罷免される（後述）〕。」

〔以下，2 つの議事録が再録される (7)。〕

3 人評議会議事録。1922 年 7 月 27 日。

会議出席者：議長イストミン，委員アンギエヴィチおよびヘイウッド。

---

(6)　「　」内は，「グループ管理者」によって出された「指令第 86 号」の再録である。РГАСПИ, 515/1/4303/21.

(7)　いずれも露語版の議事録があり，再録された英語版はいささか簡略化されていることがわかる。РГАСПИ, 515/1/4297/5-6 об., 7-8.

化学工場（プラント）。同志アンギエヴィチは同プラントの完成のために必要な資金について要求する〔問題を提起する〕。ヘイウッドは情報を求めた。1 バッテリーはこの秋に完成されるであろうか？　シブウーゴリでのアレイニコフとの会談で，コロニーが同プラントの完成を開業資金 100 億ルーブリで支援するであろうことが同意される。この金はモスクワから来るや直ちに配られる予定だが，しかし同志ヘイウッドは，同プラントが間近に完成するのに必要な全資金があるかどうかを知りたい。同志アンギエヴィチは，この問題に返答することができず，専門技師によって情報が与えられるであろうと答えた。……〔すべての質問事項が 1 専門技師に渡され，彼が次の会議で報告することになった。〕

9 人〔資産目録〕委員会。同志〔ヘイウッド〕はシブウーゴリ代表〔候補者〕に関する情報を求めた。同志アンギエヴィチはシブウーゴリによって指名された候補者がまだ到着していないと返答した。遅れは，その間シベリア工業局代表であり，9 人委員会のための指示を持っている 9 人委員会議長が到着していないことによる。同志〔ヘイウッド〕は，3 名〔実際は 4 名（後述）〕がコロニー側から目録委員会委員として任命されていることを通知する。同志ヘイウッドは万一に備えてシベリア工業局代表に，作業のための時間がほとんど残されていないので，一行が直ちにケメロヴォに向けて発つことを要求する申し出をする。

〔来る冬の準備，電力設備の状態，地下坑内の作業状況，1923〔作業〕年度の予算作成準備などに関する記述が続く。〕

〔アンギエヴィチはヘイウッドに声明文を手渡し，コロニーがロシア人労働者を労働団体を通さず，また炭鉱に通知せずに雇っていることを問題にした。ヘイウッドはそれが公正でないことを認める一方で，技師バールスの同様の雇用例を持ち出し，〕炭鉱経営陣はコロニー構成員であるバールスを，コロニーの全構成員は一定期間コロニーで働かなければならないのに雇い，そのことをコロニーに通知しなかったと述べる。アンギエヴィチは，バールスの方が申し込んできたので雇ったと返答し，バールスがなおコロニー構成員であったことを知らなかった。今後は炭鉱の全雇用主・労働者，そしてまたコロニー構成員に，いかなる異動も彼らが炭鉱経営陣またはコロニー経営陣から許可を受けないならば起こりえないことを通知することが提案される。

〔以下に続く 2 つ目の議事録は不鮮明で，ほとんど判読できず。露語版によると，1922 年 7 月 30 日開催で，ヘイウッドの求めにより技師ロハンスキー（И.И. Лоханский）が化学工場の準備状況および操業開始に必要とされるものについて報告し，質疑応答があり，コークス炉始動のために欠けている専門技師を急遽探し出すことになった。〕

〔議事録再録のあとの約 4 頁分も不鮮明で，ナジェジンスク工場に関する報告で終わっている。〕

本史料の前半部によってバイアーと上記 3 名との内部対立が明らかになり，そのことはすでに取り上げた（第 2 篇，5）けれども，上記（i）を見る限り，未解明な内情がありそうに思える。「バイアーはノヴォニコラエフスクに数週間滞在し，買い付けや土地の引き

渡し問題を解決していた」としかガルキナは書いていないが[8]，実情は本史料から窺われるように，「ノヴォニコラエフスクとケメロヴォとに彼の時間を振り分けた」不慣れな「困難な任務」であった[9]。付言すれば，『クズバス』1922 年 11 月 20 日号に載った受け入れ態勢の現状報告の中で，管理者ヘイウッドは前任者バイアーの管理不十分を次のように記した。「管理者バイアーは畜舎や倉庫を管理する時，困難を大きくした」[10]。

史料後半部に再録された 3 人評議会議事録などを見ると，ヘイウッドらによる操業に向けての準備は順調な滑り出しとは言えず，資金未着，委員会未開催，雇用トラブル，人材不足など問題山積であることがわかる。3 人評議会については，リュトヘルスの着任後も委員を代えて継続しており，後述する。

ケメロヴォに到着したヘイウッドが最初に直面した問題は，宿泊施設，公衆便所，水の供給であった[11]。実は，管理責任者としてのヘイウッドの方も，後任のリュトヘルスによっていくつかの問題点および課題が指摘されることになった。それを「クズバス年譜」から（便宜的に項目毎に数字を付して）引用する[12]。

> ①指導はバイアーからヘイウッドへ移り，後者は建築の技術的詳細さえもそこで決議された〔そのため具体的な設計プランが詰められなかった〕ところの大衆集会（Massenversammlungen）の制度をさらに続けた。②農業経営に関して意見の相違があり，4 ないし 5 人の指導者が相次いで交代した。③規則的に簿記もつけられなかった。ヘイウッドは金庫を持参して回って「領収書」があれば即金で支払っていた。④戸外で催され，しばしば個人的な摩擦に発展した大衆集会は，最も実りのないものであった。
>
> それゆえに第 1 の課題は，一定の規律（Disziplin）を導入することであり，第 2 は各自の資格・能力に相応して従事させられるべきとの原則に従って分業を浸透させることであった。
>
> 残念ながら，いわゆる組織グループにおいて，同様に最初にアメリカからやって来たグループにおいても，技術スタッフが欠けており，唯一の技師であったオランダ人バールスは，たいそう嫌われて，トミ川に投げ込まれそうになるほど脅されていた[13]。

（8） Галкина, *АИК-К*, 42.

（9） Morray, *Project Kuzbas*, 92.

（10） W.D. Haywood, “Notes from Kemerovo,” *Kuzbas*, Vol. 1, No. 7, 20.XI.1922, 1.

（11） Галкина, *АИК-К*, 50, 82.

（12） РГАСПИ, 626/1/6/12-13.

（13） 『リュトヘルス伝』のよれば，バールスが嫌われる背景には，大戦中に蘭領インドで技師として作業現場で下層労働者（クーリー）を指揮した体験があったようで，彼は入植者に向かって「なってこった！　話し合いだと？　おまえたちは私が命じたようにそれをしなければならない。おしゃべりはたくさんだ。ここでは私が決める」とぶっきらぼうに言っていた。G.C. Trincher Rutgers/K. Trincher, *Rutgers. Zijn leven en streven in Holland Indonesië,*

ここでは，リュトヘルスが大衆集会を批判していることの問題を取り上げよう。彼自身は『クズバス』創刊号の巻頭論文の中で「最高に可能な技術的・社会的効率を発展させるために十分な自治を持つ」ことを当然視していた（第 2 篇， 27)。その「自治」を保障する 1 形態として重要視される大衆集会において，技術的問題を議論することは当然のように思えるが，しかし実際にはそこでの議論は非効率すぎた。リュトヘルスは大衆集会の不備を「一定の規律」を導入して改善しようとするのだが，その試みは IWW のメンバーおよび共鳴者の反撥を招き，離脱者を出す（後述）一因となった。けれども，リュトヘルスがここでこだわったのはあくまで生産のための技術的「効率」の問題，つまり専門技術者による産業経営の問題であり，それに関連する論文を紹介しよう。それはシアトルの IWW 機関誌（*Industrial Worker*）1922 年 7 月 1 日号に掲載され，しかも『クズバス』に転載された論文「労働者管理」であり，以下に抜粋する [(14)]。

> 厳密に言えば，少なくとも「民主的経営」という意味においてではない「産業の民主的管理」のようなものは何もない。……
>
> 近代産業は，統制のとれた組織，訓練された監督または経営，および技術の不断の適用がある時にのみ生産的である。大衆の反抗は，技術がすでに手元にあり，利用のために組織されるならば，思うにそのような技術の適用に道を譲るかもしれないけれども，産業を監督し，その様々な部分を調整するためには何もできない。
>
> IWW の計画は，人間の蛭のように産業に頼って暮らす資本家と闘うだけでなく，利益をがぶ飲みする人がゆるく引き離されている時，産業を経営もし，しかもそれを効率よく経営するために各産業を組織することである。そのことは，個人の気まぐれを専門家の意志へ従属させることをある程度意味する。それは，想像することが可能だが，生産に関する限り，プロレタリアートの独裁よりはむしろ専門技術者のある種の独裁（some sort of dictatorship of the technician）という結果になるかもしれない。

そこでは「産業の民主的管理」は成り立たず，当の IWW の「専門技術者の独裁」論が，まさにリュトヘルスの試みを後押しする論を展開していたのである [(15)]。

Amerika en Rusland（Moskou, 1974）, 125; Г. Тринчер/К. Тринчер, *Рутгерс*, 118; cf. Morray, *Project Kuzbas*, 114.

（14） “Workers’ Control,” *Kuzbas*, Vol. 1, No. 5, 20.IX.1922, 3.

（15） ちなみに，ケメロヴォで図書室を開設・運営していたルース・ケネル（Ruth E. Kennell）が 9 点の定期刊行物を募り，送付を AOC に依頼し，それを受けて AOC が『クズバス』1923 年 10 月 1 日号でそれら 9 点の寄贈を読者に呼びかけた。その中には『ネイション』,『ニュー・リパブリック』,『リベレイター』のリベラル系の有力雑誌があり，IWW 系ではシカゴの IWW 本部から刊行されていた月刊『インダストリアル・パイオニア』（*Industrial Pioneer*）だけがあり，入植者の読書傾向には IWW 系図書・雑誌に重点が置かれていたわけではなかった。*Kuzbas*, Vol. 2, No. 4, 1.X.1923, 13; cf. R. Kennell, “Give a Book to Kuzbas,” *ibid.*, Vol. 1, No. 2, 20.VI.1922, 8.

リュトヘルスが妻バルタ（Bartha）へ宛てた 1922 年 9 月 4 日付書簡中の以下のヘイウッド批判は，本音であったろう。「我々は彼〔ヘイウッドは同日にケメロヴォを発ち，トムスク経由でモスクワへ向かおうとしていた〕が立ち去ることを残念に思っていない。なぜならば，彼は再三にわたり約束をし，そして指図をし，それらがあらゆる困難を引き起こした。彼は実際年を取りすぎている」[16]。

ヘイウッドのあとを追って，リュトヘルスは，CTO から新たな全権委任状を交付され，（妻バルタ，次男，末娘，そしてブロンカ・コルンブリット〔Bronka Kornblitt〕を伴って[17]）モスクワを発った。最初に訪れたナジェジンスク工場では，主にロシア人管理の拒絶的態度のゆえに規制すべきいくらかの争いがあった[18]。1922 年 7 月 21 日の朝にノヴォニコラエフスクに到着し，明日にはトムスクに向けて発とうとしていた彼は，同日 “W.D.H.”〔ヘイウッド〕に書簡を送った。そこには，以下に抜粋する内容が記されていた[19]。

> ……ここにはシブレヴコムの人たちも〔BCHX シベリア〕工業局長もおらず，クズバスの歴史と意味は多くの人が入れ替わったために大部分の職員に実際知られていないので, クズバスについてもっと多くの情報が与えられることが必要だと考えられる。
> 3 人委員会〔評議会〕の 3 番目の人〔イストミン〕は，シャトフによって大いに推薦されて承認されており，非常に好意的な印象を与えている。シブウーゴリとシブレヴコムとの合意で取り決められて，彼にはヨリ大きな権限が与えられるので，彼はシブウーゴリどころか工業局の代表になるであろう。……
> 私〔リュトヘルス〕は，いくらかの経験があるニキティン（Д. Никитин）を 7 月 22 日にニューヨークを発つ次のグループ〔第 4 陣〕を受け入れるためにペトログラートへ戻ることを提案する。それから誰が，また何がナジェジンスクとケメロヴォに向かわなければならないかを決定する全権を，彼にまた与える委任状を提供しなければならないだろう。
> モスクワからの 500 億は未だ届いていない！　電報が数度送られ，いつか金をもたらすかもしれないが，これまでのところ何もなされていない。ここにはバイアーの名においての少額の差引勘定（約 3 億）がある。私は，バイアーが罷免され，金は今後あなた〔ヘイウッド〕か，または私自身に支払われるべきとのシブレヴコムによって裏付けされた声明文を〔関係機関（？）に〕提出した。……我々はしかしながら，1,750

（16） Brief van S[ebald]. (Kemerowo) aan B[artha]. (Tomsk), 4.IX.1922, in: “Nederlanders bouwen,” 46.

（17） 前注の書簡の宛先がトムスクの “B.” となっているのは，バルタが夫の病状快復後の健康不安もあり，夫のケメロヴォ行に最後まで同行しようとしたが，就学問題もあって子供たちとともにトムスクに住むことになったからである。“Nederlanders bouwen,” 43.

（18） РГАСПИ, 626/1/6/11.

（19） РГАСПИ, 515/1/4299/118-119 об.

億は永く続かないだろうし，ナジェジンスクもまたそのいくらかを要求するであろうから，我々の金に非常に注意深くあらねばならないだろう。

〔追伸〕私は次のグループの歓迎にニキティンをペトログラートに行かせるため別に取り置かれるべき 5 億をグリエヴェフ〔もしくはグリエネフ〕の手元に残した。

リュトヘルスはケメロヴォへ向かう途中で必ずしも歓迎されたわけではなく，ロシア人スペッツ（спец; スペシャリストの略で，ここでは非党員専門技師を指す）ばかりか一部の共産党員も反撥ないし反対の態度を示した。例えば，クズバス・トラストの管理者で共産党員でもあったバジャノフ（В.М. Важанов）の歓迎はよそよそしかった。なぜ共産党員が反対するのか，と同行していたブロンカが不平を漏らした際，リュトヘルスは次のように答えたという。彼らはおそらく我々の力を信じておらず，外国資本なしにはやっていけないか，あるいは自分たちの力でやっていけると考えているが，「しかし我々は我々ができることを証明しなければならない」と [20]。

1922 年 8 月初め頃 [21] にようやくリュトヘルスはケメロヴォに到着した。その時のことを，「クズバス年譜」作成の 2 年前に彼は次のように記録していた。「状態はかなり混乱していて，私〔リュトヘルス〕の到着後，最初に古い行政〔機関〕と暫定的な協定が結ばれた。この行政はそれからまもなく廃止され，我々が権限を譲られた」[22]。そのことに関して，ガルキナは次のように説明している。リュトヘルスの到着直後にノヴォニコラエフスクとトムスクの地区行政機関は，ケメロヴォ地区の管理のために 3 人から成る委員会の創設を提案し，それに議長リュトヘルス，ポポフ（С.А. Попов），そしてグリンドレル（Б.Ф. Гриндлер）が入った，と [23]。しかし，リュトヘルス〔署名はないが，原本にはあったのかもしれない〕のビル〔ヘイウッド〕宛 1922 年 8 月 2 日付書簡によれば，その委員会は上記 3 人評議会が委員を交代して継続されていたものである [24]。同書簡によって以下，リュトヘルスの赴任直後の活動報告を抜粋・紹介しておこう。

4 週間前に我々はノヴォニコラエフスクに到着し，そこで私〔リュトヘルス〕はすぐにシブレヴコム中央委員会，シブウーゴリなどの職員と接触した。シブウーゴリは，それを通じて我々は CTO によって採択されたような諸条項を除外することに取りかからなければならないであろうから，重要な組織体である。シブウーゴリの長である

（20） Trincher Rutgers/Trincher, *Rutgers*, 121-122; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 115; cf. Morray, *Project Kuzbas*, 110.

（21） ガルキナが著書の年表に「8 月 1 日」と記した（Галкина, *АИК-К*, 203）そのケメロヴォ到着日は，リュトヘルスの 8 月 2 日付書簡（下記の注 24）を見ると，「今ここ〔ノヴォニコラエフスク〕に 17 日間いる」とあり，今のところ確定できない。.

（22） S.J. Rutgers, “Kurze Übersicht wie die Übereinkunft über die A.I.K. Kuzbas zu Stande kam” [Moskau, 12.VII.1931], РГАСПИ, 626/1/6/74 об.-75.

（23） Галкина, *АИК-К*, 58.

（24） РГАСПИ, 515/1/4299/134-136.

アレイニコフは，〔資産〕目録委員会の任命に関して私と同意し，私はハーン（Harn との表記だが，管理能力にたけた S. Hahn であろう），ケンタ（E. Kentta; 有資格坑夫），シュタインハルト，そしてアウエルバッハ（Auerbach; 合州国で目録作成の仕事をしていた）を指名した。党員である同委員会議長は未だ到着していない。アレイニコフ側の遅延行為の理由が，私にはわからない。〔3 パラグラフあとの文章を続けると〕目録委員会の仕事は未だ始まっていない。私見では，責任はアレイニコフにある。

この〔目録委員会〕問題で 3 人評議会議長のイストミンが 5 日間ここにいた。彼と一緒に到着したアンギエヴィチ，そして〔ヘイウッドに代わって〕私を加えて 3 人評議会が 2 回開催された。会議の中で私は交渉相手となるであろうアンギエヴィチを研究した。彼はコロニーに対していくぶん反感を抱いているにもかかわらず，我々が争わなければならないのは彼だけだとは思えない。

3 人評議会のこのあとの動きは，ケメロヴォからリュトヘルス〔署名はないが，原本にはあったのかもしれない〕がモスクワのシャトフ宛 1922 年 8 月 22 日付書簡で，次のように触れていた[25]。「ロシア人管理者アンギエヴィチは，彼の行政官とともに罷免され，炭鉱技師長は 2，3 日中に去り，その一方で大部分のロシア人スタッフはむしろ無関心である」。「我々は 2 人のロシア人と私自身の混成行政機関が移行期に良い成果をもたらすかもしれないことをなお期待している。イストミンがどうしようない人だとわかったので，我々はこれまでも，また今でさえ時間をむだにし，ノヴォニコラエフスクは 3 人評議会についていかなる決定も指示も未だ出していない。アンギエヴィチの代わりに明らかに任命されてポポフがケメロヴォに来る準備をしている，との電報を我々はちょうど受け取った」。

結局，両ロシア人委員とも交代し，3 人評議会は「廃止」に向かっていく。この際，リュトヘルスはシャトフに「これまであなた方が我々に寄こす人たちとは我々ははなはだうまくいってこなかった。……うまく合わない人たちの数を増やさぬように，どうか以前の了解なしに人を送るのに大いに注意してもらいたい」とまで言っている。シャトフおよびその背後にあるソヴェト政府機関による人選の不運が続いている。

リュトヘルスが現場でまず直面した緊急問題は，2 つあった。つまり，①いかに現場の無秩序状態（アナーキー）を克服するか。②いかに入植者をクズバス・トラスト内の操業中の企業へと導くか。АИК-К へ移管前の同企業は，あたかもアメリカ人との契約がなかったかのようになお管理されていた[26]。

①については，上述のように，リュトヘルスが特に「規律」を導入し，自らを唯一の管理責任者と覚悟して積極的に難局を乗り越えようとした。そのことを如実に示す重要なリュトヘルスの書簡を，以下抜粋・紹介しよう。それは，1922 年 8 月 27 日にコロニーの全体集会が開かれ，ヘイウッドが第 4 陣で到着して技師長となったピアソン（A. Peason, Jr.）

（25） РГАСПИ, 515/1/4299/141-143.

（26） Morray, *Project Kuzbas*, 110.

を紹介した[27]，その日のうちに，リュトヘルスが両氏宛にタイプで打った 5 枚もの書簡だった[28]。

〔全体集会の前日〕私〔リュトヘルス〕は執行部スタッフの輪郭を描き，それを経営委員会に提示した。……〔以下，化学工場（プラント）の責任者にとどまるマーラー博士ら 10 名の名前がそれぞれの任務とともに記される。10 番目のウィックストロム（O. Wickstrom; 坑夫）は入植者からの表現部門を担当し，不平などを抱いた入植者は〕もしも必要ならば同志ウィックストロムに助けを求め，それを彼は経営委員会まで持っていく役割を果たす。……／規律の問題について私は，規律の一連の規則を作成すべき中央委員会を持つか，または委員会を選出するかを最良と考える。個人については，同志ウィックストロムが陪審員となり，判断を下すであろう。

〔本年〕10 月 1 日あるいはその頃にコロニーは全資産の管理を引き受けることができる〔実際にはロシア人との共同管理がしばらく続く〕。……もしも入植者がこの資産を管理するのに資格があると考える 1 人間を持たないならば，入植者がいかにうまく組織されたとしても，ソヴェト政府は入植者グループに資産を移譲しないだろう。私は〔贖罪の〕山羊であるように思える。我々がこれらの炭鉱を引き継ぐならば，私はそれら〔の責任〕を引き継ぐつもりだ。もしもそれらが火災を起こすならば，私はトムスク〔の政府機関〕に呼ばれて，裁判にかけられるつもりだ。私は責任がある人間だ。……もしも規律がこのコロニーで受け入れられなければ，私はこれ〔深刻な状況〕を引き受けることができない。

以上がピアソン宛の文章からの抜粋で，ヘイウッド宛には「会議〔のため〕の会議は結論が下され，同志ピアソンが我々に語らなければならなかったことをすべて聴いたので，会議は今休会するであろう」と大衆集会への制限が改めて伝えられた。

②については，ロシア人管理下であった時期（後述），リュトヘルスらは「ほとんど満足のいく状態を見出せなかった。炭鉱地区の〔大戦前からの〕経営者アンギエヴィチは自らを公然たる敵と称し，アメリカ人を重苦しくした」[29]。その上に，スペッツとの関係は険悪で，彼らによる最悪のサボタージュの例は，新設された発電所のタービン発電機を試運転する前日，その枢要部が砂を投げ入れられて破壊されたことであり，担当アメリカ人技師は昼夜を問わずの復旧作業に追われた[30]。

新契約締結後も，スペッツの反抗は陰に陽に続いていく。

（27） Галкина, *АИК-К*, 203.

（28） РГАСПИ, 515/1/4299/145-147.

（29） РГАСПИ, 626/1/6/12.

（30） Rutgers, “A.I.K. Kuzbas,” РГАСПИ, 626/1/9/7.

第 2 章　新契約に向けての交渉

レーニンは病に倒れる直前までクズバス・プロジェクトの進捗状況を絶えず気に留めていた。1922 年 4 月 5 日にレーニンのルィコフ（А.И. Рыков; 1921 年 5 月から СНК および СТО の議長代理を兼任）へ次のように電話（口述）をしていた [1]。

> リュトヘルスとアメリカ人労働者グループの利権の件について，マルテンス（Л.К. Мартенс）から私に知らせてきたところによると，進捗状況は非常に悪い。点検して真剣な注意を向けなければならない。これは政治局の特別の許可で我々がアメリカ人労働者に与える例外的な利権である。／特別な支持と点検がなければ，本件はすっかりだめになるおそれがある。／マルテンスに報告を求め，本件全体のなりゆきをもう少し厳重に点検するようお願いする。

かかるレーニンの心配とは別に，（第 1 篇で論じたように）同プロジェクトを反対ないし不安視する立場から絶えず気にしていたソヴェト政府諸機関，つまり СТО，ВСНХ，そしてゴスプランの委員たちがいた。1922 年 4 月 8 日にニューヨーク港を AOC による労働者派遣第 1 陣が出航して，ロシアへ未だ到着していない時期に，早々と以下に取り上げる意見が表明されたということは，いかにソヴェト政府関係諸機関内の反対論が根深いものであったかが窺える。

4 月 20 日，ゴスプランの（1921 年 2 月から務めていた）議長クルジジャノフスキー（Г.М. Кржижановский）は，スモリヤニノフ（В.А. Смольянинов; СТО 総務部次長）宛書簡で АИК-К との契約履行に関して不明確さなどを疑問視し，5 項目にわたって以下に抜粋する意見を提示した。つまり，②「ソヴェト政府からの 30 万ドルの支出は，つまらない必要最小限のものだ」; ④「残念ながら，契約書では，いつ，いかなる期間で全体として 5,800 人になるはずのアメリカ人一行が到着しなければならないのか，きちんと定められていない」; ⑤「私の意見では，アメリカでの新たな労働者募集は直ちに中止しなければならない」「必要としているのは，然るべく訓練された労働者と技術者だけだ」[2]。

クルジジャノフスキーは半年前の 1921 年 9 月，クズバス計画の賛否が問われる大詰めの段階で，同計画は「ロシアにおける最初の労働者コロニーであり，国際的意義を持って

---

(1)　『レーニン全集』第 45 巻（大月書店，1969），675-676［『レーニン全集』からの本篇での 引用に際しては，表記を本文の表記と揃えている］.

(2)　“Организация Автономной колонии американских рабочих «Кузбасс» (1921–1923 гг.),” *Исторический архив*, 1961, No. 2, 91-92. ④の 5,800 人は最初の契約で設定された人数で，その内訳はクズバスに 2,800 人，ナジェジンスクに 3,000 人であった。ibid., 88.

いる」と判断して同計画案を支持していた[3]。その彼もまた早々と，ソヴェト政府にはそれほど大規模な企業を支援する財政力は現時点でないとみなして，АИК-К の活動計画（プログラム）の縮小に賛成した。その意見は，ВСНХ 議長ボグダーノフ（П. А. Богданов）に共有された。契約破棄を主張する意見さえもあったという[4]。

1922 年 6 月 7 日，АИК-К 組織委員会の СТО 代表委員（第 1 篇，24）シャトフは，СТО へ以下に抜粋する АИК-К の労働者到着と財政問題に関する報告書を提出した[5]。

〔労働者派遣第 3 陣が 6 月 7 日にニューヨーク港から出航したところまでが報告される。〕……今夏，総計 500 名までの労働者がやって来るだろうとみなすべきだ〔実際には約 400 人〕。

すべての機関を通じて我々の予算案が承認される結果を待たずに，我々は ВСНХ から予算内の貸付金 300 億を受け取り，従って一時的に財政難を解決した。……

その間，ВСНХ 利権委員会はコロニーとの追加協定を立案し，今リュトヘルスとの合意を取り付けることだけが残っている。全体として同志リュトヘルスは，契約の基本的立場にとどまりながらも，その契約に一定の修正を加えることに同意し，それで近いうちに作り直される契約を承認のため СТО に提出することが可能となるだろう。

わがネップの状況下でケメロヴォ地区の諸企業を借用することのあらゆる困難を考慮して，リュトヘルスとヘイウッドは，これらの企業を現在の管理機関の下に置くことが必要だとの考えに傾いている（しかし，これらのコロニーへの移行は遅くとも次の作業年度の開始，つまり本年 10 月 1 日までに実現するように〔との条件で〕）。この期間まで，アメリカ人労働者の一部は建築された住居に入り，農場での準備作業に取りかかり，残りは入植者の代表によって補充された現在の管理機関の監督の下で作業を始めなければならないだろう。この計画のシベリアでの実現のために，リュトヘルスと，多分ヘイウッドは出かける〔両者の派遣については，第 1 章参照〕。

下線部には「協定／同意」（соглашение）と「契約」（договор）が混在していることに着目してもらいたい。「追加協定」のその後について，『リュトヘルス伝』には「2，3 週間後に新協定〔露語版では「新契約」〕の暫定案が出来上がり，『いまやすべてが落着している』」と記されている[6]。「出来上がった」と言う限り，それは追加協定案であろうし，ガルキナも「6 月初めまでに ВСНХ 利権委員会は АИК-К との追加の協定案を作り上げた」とある[7]。けれども，下線部を見る限り，シャトフには修正を加えた新たな契約案

（3） Е.А. Кривошеева, “Из истории образования «Автономной индустриальной колонии Кузбасс»,” *Из истории Западной Сибири*, Выпуск 1（Кемерово, 1966）, 218.

（4） Г.Я. Тарле, *Друзья страны Советов. Участие зарубежных трудящихся в восстановлении народного хозяйства СССР в 1920-1925 гг.*（Москва, 1968）, 307-308.

（5） “Организация АИК-К...1921-1923,” 92-93.

（6） Trincher Rutgers/Trincher, *Rutgers*, 119; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 113.

（7） Галкина, *АИК-К*, 58.

が「近いうちに」CTO へ提出されることへの楽観があり，そこにはリュトヘルスらがこだわった事柄が看過されている。

そのことは以下のタルレの説明の中に窺われる。つまり，CTO は АИК-К との契約を変更することを決議した。1922 年 6 月 16，19 日に上級利権委員会が審議した活動領域の暫定的な制限〔ナジェジンスク工場の移管延期〕を受け入れながら，リュトヘルスとヘイウッドは，契約の原則に関わる方針を変更する試みを，また先進的な外国人労働者の企業を通常の「商業的企業合同体（トラスト）」に変えることも断固認めようとしなかった。リュトヘルスらが立てた原則とは，国有企業であり続け，その全生産物はソヴェト国家に属し，国家はコロニー構成員に多かれ少なかれちゃんとした生活条件および企業の発展可能性を保障することである。彼らの頼みに従って，CTO は同年 10 月 1 日まで新契約の認可を延期することに同意した。それまでの間，クズバスにおいては旧クズネツク・トラスト〔クズバス・トラスト〕とコロニー管理機関の混合の指揮が存続した [8]。

ここから，新契約に向けての交渉が（認可延期があるものの）始まったのである。

その「延期」の間，ヘイウッド，続いてリュトヘルスがクズバス（ケメロヴォ）に出向いていた間，レーニンの方に動きがあった。つまり，レーニンは，1922 年 8 月 25 日から 9 月 1 日の間〔8 月 30 日か？〕に書かれた書簡の中で，次のように АИК-К の現状についてリュトヘルスへ問い合わせてもらうことを〔CTO 議長代理〕ルィコフに頼んでいる。「『イズヴェスチヤ』（8 月 25 日付だと思う）切抜きを送る。特別の注意を払うように指図してはどうか。調べること（総務部長〔ゴルブノフ（Н.П. Горбунов)〕か秘書を通じて）。／もしこれが事実なら，極力支持すること。／リュトヘルスの方は，ものになったのだろうか？　まずだめとは思うが」。

レーニンが（未だ АИК-К の操業が正式に始まる前に）早々と悲観的に見ていたことは留意すべきで，その悲観的な早急な判断が，病に倒れる直前にレーニンをしてリュトヘルスを再度強力に後押しする気持ちにさせなかった（後述）1 要因であったろう。それとは対照的に，リュトヘルスの方は楽観的で積極的な姿勢が続いていくのだが，そのことはルィコフに代わって〔CTO 総務部次長〕スモリヤニノフによる以下の返答にも垣間見られるようだ。つまり，リュトヘルスがクズバスから帰ったのちに，彼のグループとの契約変更の交渉は行われるだろう；リュトヘルスの企業のためにアメリカから夏の間に 400 人までの資格を持った労働者と若干の著名な専門技師が到着した；彼らはトラクター，種子，衣類，工具，食糧などを持って来た，と [9]。

---

(8)　Тарле, *Друзья страны Советов*, 312-313（傍点引用者）.

(9)　『レーニン全集』第 45 巻, 730-731, 920-921; cf. *Владимир Ильич Ленин. Биографическая хроника*, Т. 12（Москва, 1982）, 366, 369-370. 「切抜き」とは，「『ソヴェト・ロシアの友』の真の援助」という記事で，「ソヴェト・ロシア友の会」〔1921 年 8 月に設立された共産党系の合法的補助団体で，1922 年 2 月以降『ソヴェト・ロシア』が同会の公式機関誌となっていた〕会員の組織したトラクター部隊の，ペルミ県オハンスク郡トイキノ・ソフホーズでの活動が報道されていた。

その「延期」の間，またАИК-К側の対応である議論なども始まっていく。

リュトヘルスはソヴェト政府諸機関との大詰めの新契約交渉を控えて，1922 年 9 月 5 日にAOC宛に書簡を送った。原文は未見で，以下はガルキナの紹介による。

10 月初めに 2 人の AOC 委員が成し遂げられた仕事の全面的な情報と自分たちの提案をモスクワに持って来ることを，リュトヘルスは求め，そして合州国の「クズバス」はキャルヴァートの名前と結びつきすぎているとの理由を付けて，彼の代わりにスカイラー（M. Schuyler）とリース（Th. Reese）の派遣を指定した，と[10]。

この人選に関して，ガルキナは以下の解釈を下している。リュトヘルスは〔新〕契約に加えられる修正へのキャルヴァートの反動（リアクション）を，またキャルヴァートとヘイウッドの見解の類似性を，つまり彼らの共同しての反対を予見して，コロニーの最初の利権からの後退に極端すぎず反応できるところの人たちとともにАИК-Кの運命を決める方を選んだ，と。確かにリュトヘルスのキャルヴァートへの低い評価は一貫している。そうかと言って，スカイラーとリースが「運命を決める」人選だとは言い過ぎであろう。交渉内容が技術が主であるため技師の指名は自然であり，スカイラーは実際に役に立ったが，リースについては私なりに問題点をあとで挙げよう。

続いてガルキナは，以下のように興味深い事実を紹介している。

両名のモスクワ到着直後にウラルからベルグとニキティン，遅れてヴァン・ホッフェンがやって来た。彼らはナジェジンスク工場の維持を支持していた。スカイラーは，〔ナジェジンスク工場の主任技師として期待されて早々と第 1 陣でやって来たものの複雑な境地に立たされ，神経をすり減らしていた〕ヴァン・ホッフェンとともに昼夜を問わず過ごし，〔同工場に関する〕大量のデータを処理することを手伝った。

〔露語を解さないヴァン・ホッフェンの補助役でもあった〕ベルグは，ブハーリン（Н.И. Бухарин）と会い，同工場の重要性を納得させることに成功して，その日のうちにブハーリンの推薦状を持ってゴスプラン議長代理ピャタコフ（Г.Л. Пятаков）に面会した（その時ゴスプランには，ナジェジンスク工場に関する露語に翻訳された報告書は未だ提出されていなかった）。ピャタコフは審議を延期し，ヴァン・ホッフェンの話を聞くことに同意した。早速ピャタコフに会ったベルグ，スカイラー，そしてヴァン・ホッフェンは，いくらか希望を抱いた。リュトヘルスの方もまた，レーニン宛 10 月 24 日付書簡（下記）で，現状は好機であり，資金が投入されればうまくいくだろうとの確信めいた考えを述べていた。

それにもかかわらず，ゴスプラン幹部会がナジェジンスク工場に関する報告書の詳細な審査を委任していたロシア人スペッツと学者の意見は，「クズバス」を支持しなかった。幹部会会議で移管に反対したのは，パブロフ（Павлов）教授，ВСНХ 議長ボグダーノフ，СТОウラル地区代表ロモフ（А. Ломов）であった。結局，ヴァン・ホッフェンはデータをもとに論証的，かつ説得力のある返答をすることができなかった[11]。その時，彼は「打ち

（10） Галкина, *АИК-К*, 58-59.

（11） Галкина, *АИК-К*, 59.

ひしがれた」[12]。

「延期」期間が終わった直後の 1922 年 10 月 3 日にリュトヘルスは，АИК の予算審議のための CTO の委員会会議（ゴスプラン議長クルジジャノフスキー主宰；以下の史料では「ゴスプランでの審議」と記されていく）招集の電報を受け取った[13]。リュトヘルスがブロンカを伴ってモスクワへ向けてケメロヴォを発つまでの様子は，ケネルの 11 月 1 日付書簡に以下のように記されている[14]。

> いまや冬を切り抜けさせるために抱え込んだ男 233 人，女 80 人，そして子供 80 人を含む 400 人のコロニーで，経営委員会は当初始めなければならない。予備的調査（サーヴェイ）はすでに行われ，1 報告書が執筆された。同報告書は現状を概観（サーヴェイ）した上で，コロニーだけでなく……近郊の 1 万人の現地ロシア人家族とともにケメロヴォ炭鉱周辺に建設されるべき近代都市を詳細に立案している。それはまたこの人口を食べさせるための 6,000 エーカーのモデル農場を要求している。報告書にはアメリカとドイツで購入されるべき機械・装備品の（総額数百万ドルに及ぶ）詳細リストが含まれている。
>
> 10 月 5 日，リュトヘルスは〔89 頁に及ぶ〕同報告書をソヴェト政府に提出するためモスクワに向けて発った。クズバスの運命は，この決定にかかっていた。

リュトヘルスらは，自分たちの提案をノヴォニコラエフスクでまず支持された上で，日付は確認できないが，モスクワでのクルジジャノフスキー議長のゴスプランでの審議に臨んだ。その模様は，主に「クズバス年譜」および『リュトヘルス伝』によって以下のとおりである[15]。

技師でゴスプラン委員でもあったフョドロヴィチ（И.И. Фёдорович; 前フランス-ベルギー株式会社コピクス〔Копикуз〕[16] 所長兼管理責任者）は，現状では АИК-К を収益の多い企業へと変えるのは不可能であり，外国人資本だけが困難な現状を救うことができ，ケメロヴォ炭鉱の利権を外国資本主義者へ引き渡すべきである，と主張した。彼とラビノヴィチ（Ф. Рабинович）は，我々〔リュトヘルスら〕の提案を激しく批判し，我々の確かにかなり素朴な予算を拒否した。ラビノヴィチはまた，石炭業全体の監督者としてコロニーの終焉を要求する次のような文書を提出した。つまり，予算があまりに単純に思い描か

（12） РГАСПИ, 626/1/6/16.

（13） Trincher Rutgers/Trincher, *Rutgers*, 128; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 121.

（14） R.E. Kennell, “A Kuzbas Chronicle,” *The Nation*, Vol. 116, No. 3000, 3.I.1923, 10; cf. id., “Lenin Called Us: A Kuzbas Chronicle,” *New World Review*, Vol. 39, No. 4, Fall 1971, 88.

（15） РГАСПИ, 626/1/6/15; Trincher/Trincher, *Rutgers*, 128-129; Тринчер/Тринчер, *Рутгерс*, 121-122; ; cf. Галкина, *АИК-К*, 60, 62.

（16） コピクスは（1920 年 1 月に国有化されるけれども）早々と 1918 年に同管理機関は ВСНХ に詳細な報告書を提出して，クズバス資源開発に向けて外国資本の誘致の必要性をしきりに説得し，私企業コピクスが国有化されないことを保証するよう ВСНХ に要請していた。Кривошеева, “Из истории образования,” 230.

れている；支出が常に上昇することを考慮しているか？；АИК の目標は気高いが，しかし事実，数字，評価を考慮しなければならない，と。

リュトヘルスは反論し，以下を強調した。コロニーの外国資本からの独立は決定的な経済および政治的意義がある；到着したばかりの技師〔ピアソン〕の〔優れた〕能力；生産組織の新方式導入による生産効率の向上；新トラクターでの農場の進歩；作業規律の確立；最悪のトラブルメイカーの離脱。

結局，我々の反対者から数え切れない質問が出されたが，しかし最終的には我々に有利な決定がなされた。議長クルジジャノフスキーは，ゴスプランは АИК-К の更なる発展に賛成し，コロニーに可能なすべての支援を与えるであろうが，しかし契約ではいくらかの変更が必要だ，とまとめた。その結語が CTO の立場として採択された。

同じ頃，10 月 15 日に（当地に参集した）АИК-К 組織委員会と AOC の委員たちによる合同の第 1 回会議が，続いて（日付は未確認だが）第 2 回会議がそれぞれ開かれた。いずれの議事録も私は未見で，以下はガルキナによるしかない簡約な紹介であり，どのような議論があったかはわからない[17]。

第 1 回会議の出席者は，ヘイウッド，リュトヘルス，リース，スカイラー[18]，CTO（ママ）を代表して〔欠席のシャトフの代理を務める資格があったのだろうか？〕ニキティン，そして（投票権なしで）ベルグとブロンカだった。

リュトヘルスは，最初の契約はネップが状況全般に影響を及ぼすことに未だ成功していない時に締結されたもので，ネップが発展した現況では同契約を履行することは不可能になったと説明した。〔その打ち出された方向性からであろう〕コロニーを貨幣〔制度〕を基礎として法人化し，労働力の募集をロシアからの要求に沿ってのみ行い，アメリカ市場で専門技師を高報酬で募ることが提案された。

技術と設備の調達でロシア側の負担と合州国での借金がかさみつつあった。ソヴェト国家側からの財政支援が減り，コロニー活動の好結果がある限りにおいてだけロシアからの資金受領がありうることが見込まれた。資金をロシアで受け取れない場合は，アメリカで資金を探し出すか，それとも計画の清算しかない〔と財政問題が議論された〕。

第 2 回会議の出席者は，ヘイウッド，リュトヘルス，リース，スカイラー，そしてシャトフの委員のみで，2 つの重要な決定が下された。1 つは，管理機関の抜本的な改編で，シャトフが CTO によって任命される 3 人（ケメロヴォ，モスクワ，ナジェジンスク工場〔各担当〕）の委員が管理機関を組織することを提案し，それは AOC の清算を意味した。その提案は，3 票（リュトヘルス，シャトフ，リース）対 2 票（ヘイウッド，スカイラー）で採択された。もう 1 つは，〔熟練労働者と未熟練労働者との間の賃金格差が急速に拡がっていた〕17 等級（カテゴリー）に分けられたロシア賃金制度の導入の採択であった。

いずれの決定も，特に 1 番目は投票にまでかけられて票が分かれたからには，議論があったはずだが，ガルキナにとっては，上述のように，決定に至る方向性を当然視するとこ

（17） Галкина, *АИК-К*, 62.

（18） 1922 年 9 月 6 日にニューヨークを発った（第 2 篇, 28）スカイラーとリースは，10 月 9 日時点ではモスクワに到着していた。“Nederlanders bouwen,” 49.

ろがあって，その意見対立は彼女の紹介から漏れたのではないだろうか。

上記ゴスプランでの審議の結果を受けたレーニンは，10 月 20 日にゴルブノフと会談した[19]。ナジェジンスク冶金工場をリュトヘルスらに引き渡して，果たして成果が上げられるか，がゴスプランでの審議で問題視されたようだ[20]。レーニンは同工場およびケメロヴォでのロシア人労働者数に関する書面による問い合わせをし，クズバスのいかなる部分をケメロヴォが構成するか，換言すればリュトヘルスの自治産業コロニーを後退させなければならないその部分を明らかにする準備をゴルブノフに委任した。

АИК-К への批判が渦巻く中，リュトヘルスは 10 月 24 日，レーニンへ以下に抜粋・要約する独語書簡を書き送った[21]。

> 不可避の当初の困難（小児病！）を私〔リュトヘルス〕は大部分克服されたものとみなす。我々は今技術的に，また組織的に準備ができており，いまや本来の仕事にしきりに着手したくてしようがない。
>
> 我々は短期間にかなり豊富で貴重な経験をした。〔それぞれ改善された 5 項目の報告が続く。〕
>
> 〔それらによって「達せられた成果」および各作業の進捗状況が続く。〕ナジェジンスク工場では，技師ヴァン・ホッフェンを頭に約 70 人が働いている；男爵（バロン）タウベ〔Барон Таубе; 同工場の前所有者で，経営を任されていた〕が古い方式を擁護し，新しい方式の導入を阻止するために可能なすべてのことを行っているが，目下ゴスプランで同工場の完全な移管をめざしての計画案が審議されている；ケメロヴォでは，当初技術職員不足だったが，非常に有能な炭鉱技師ピアソンが到着した〔など〕。
>
> ロシアとアメリカの労働者間の関係については，非常に良いがしかし，ロシアの技師とはいくぶんヨリ悪い。
>
> 必要な支援。我々は我々の計画遂行に対して少なからぬ資金を必要としている。目標は高く，私の考えでは，好機であるが，投入資金は比較的わずかである。

続いて 10 月 30 日にリュトヘルスとリースが署名した書簡が CTO へ送付された[22]。それは，ゴスプランが АИК-К によって提出された報告と予算案を審議して，その結果が CTO に上申されようとしていた時期に出された。内容は，上記 АИК-К 第 2 回会議で決定され

（19） *Ленинский сборник*, Т. 39（Москва, 1980）, 431; *В.И. Ленин. Биог. хроника*, Т. 12, 426-427; cf. Тарле, *Друзья страны Советов*, 314.

（20） モレイによれば，リュトヘルスはゴスプランでの審議に危惧の念を抱き，『プラウダ』に論文を書いたが，結果を一時遅らすだけに終わった。Morray, *Project Kuzbas*, 134. その論文は “Год опыта в Кузбассе”（*Правда*, No. 240, 24.X.1922, 1）だが，マイクロフィルム版を所蔵する国内の図書館のうち 1 つは欠号で，もう 1 つは不鮮明で未読。

（21） РГАСПИ, 5/3/246/59-62;（露語訳）“Организация АИК-К...1921-1923,” 94-95.

（22） “Организация АИК-К...1921-1923,” 96; cf. Галкина, *АИК-К*, 62.

た経営委員会の改編に絞られていた。つまり，生産よりは宣伝にヨリ多く重きを置き，15名もの組織委員会を持った最初の組織形態は廃止され，それに代わって3名（ケメロヴォ，ナジェジンスク工場，モスクワに各1名から成り，その上，ニューヨークや他の国での全仕事への全権をも持つ）の経営委員会委員を任命することが，CTOに求められた。

続いて，この要請が重要かつ緊急であることの理由が，〔末尾にある「ソヴェト政権の用事で」シャトフが一時離任することに伴う交代要員の指名要請を除いて〕次のように記された。「今の管理機関の中には様々な意見の違いがあり，それが実際の生産への準備のための作業にブレーキをかけるであろうから」（強調引用者）。

その背景には，リュトヘルスがこれまでに体験したAOC委員やヘイウッドとの意見対立が確かにあったろう。その対立の容易な解決策，つまり排除という考えがリュトヘルスにあったとは考えにくい。そのことを考える前に気になるのは，その「CTOによって任命される3人」から成る管理機関を第2回会議で提案したのがシャトフであったことであり，その背後でCTOの意向が働いていたのではないだろうか。リュトヘルスが率先して3人体制を考えた形跡は今のところ確認できないし，その後の管理者代行や後任を決める際も必ず彼はソヴェト政府機関に人選を依頼していく（後続篇）。たとえCTOの意向が働いていたとしても，その提案にリュトヘルスが同意したのは，独自の考えがあったからではないか。つまり，引用文の後半にあるように，（大衆集会に対して上記改善策を講じる際に彼がこだわった問題と同様に）生産の「効率」問題こそが彼にとって優先事項であったのであり，彼にはその「効率」に響くであろう内紛がソヴェト・ロシア経済復興への支援という大義のために支障をきたしかねないという考えが，そこにはあったのではないか。

また，本書簡の署名にリースが加わったのは，リースが第2回会議の議長を務めることになり，その時の投票でリュトヘルスを支持して本再編案が採択されたためであろうと推測される。第2篇での紹介以来，リースの発言には特段の主張があるわけではなく，技術面での力量も高いとは言えず，AOCの中で唯一リュトヘルスの方針に賛同したがゆえの抜擢のように思える。そう私が判断するのは，改編後のAOCでリースの不適格な指導が露呈することになるからである（次篇）。

翌10月31日，ゴスプラン幹部会会議でリュトヘルスは，クズバスとウラルとの近接性に方向付けられた自らの計画を次のように熱心に説いた。「クズネツク炭田の急速な発展は，ナジェジンスク工場側からの主な援助なしにはほとんど考えられない……クズバスとナジェジンスク工場 ── このコンビナートは，ソヴェト政権のために大きな支えとなりうる強力な一団（ユニット）となりつつある」。しかし，ゲンキナが指摘しているように，このコンビナート（言い換えれば「ウラル-クズネツク・コンビナート」）計画は第1次5カ年計画で初めて実現されるけれども，1921−22年の状況ではゴスプランからの異議（申立）が重く受けとめられた[23]。

本件の計画へのリュトヘルスの意志は固く，『クズバス』1923年1月20日号に載ったCTOによって保証された予算報告には，「我々の来る2年間の努力はナジェジンスクでの

（23） Э.Б. Генкина, *Ленин−председатель Совнакома и СТО. Из истории государственной деятельности В.И. Ленина в 1921-1922 годах*（Москва, 1960）, 162-163.

発展に集中されるであろうから，もしもソヴェト政府が財政支援を制限することを望むならば，ケメロヴォのための資金の制限は可能であろう」とまで記されていた[24]。

本件に関してリュトヘルスは後年，次のように評価した。クズバスは第 1 次 5 カ年計画の中に，ウラル地方〔諸企業〕と協同した新しい冶金センターとして含まれることになった。さらにそれは急速なテンポで発展し，我々は皆それが大祖国・反ファシズム戦争に勝利するのにどれほど重要な役割を果たしたかを知っている。АИК-К の困難な数年間を経験した人々は，その後の巨大な発展に自分たちがささやかな貢献をしたことにいくらかの満足を感じても差し支えない，と[25]。

ナジェジンスク工場問題は，引き続き АИК-К 側で審議された。

1922 年 11 月 12 日にモスクワで開かれたクズバス経営委員会会議については，議事録から直接，以下のように抜粋する[26]。そこでの重要議題はナジェジンスク工場移管についてであり，リュトヘルスは早々とソヴェト政府側の移管先延ばしをやむなしと了承したのでは決してなく，移管実現のための対策を依然模索し続けていた。

出席者は，ヘイウッド，コスグローヴ（P.P. Cosgrove; スカイラーとリースを追うように遅れてモスクワ入りした），リース（議長），リュトヘルス，スカイラー，シャトフ（以上委員）；ニキティン，マーラー（Dr. W.H. Mahler; 化学工場（プラント）の主任技師），キショァー〔スパークス〕（Kishor〔N. Sparks〕），シュタインハルト（マーラーの助手），シュルツ（Schultz），マルスキ（H. Marsky）（以上ゲスト）；ブロンカ（記録書記）であった。

11 月 2 日，4 日の各会議議事録〔未見〕が読み上げられ，承認されたあと，リュトヘルスが以下のように報告した。最近の進展について，ナジェジンスク工場からリュトヘルスは話しはじめる〔それはゲスト出席したマーラーらの顔ぶれからわかるように本会議の重要議題だった〕。ロシア共産党中央委員会によって，ナジェジンスク工場問題について判断を下す委員会委員（ピャタコフ，ボグダーノフ，アンドレエフ〔A.A. Андреев〕）が任命され，その会議にロモフとリュトヘルスが出席した。その結果，アメリカから新しい専門技師が到着し，移管のために満足できる提案が行われるまで，それは延期されることになった。〔ただし，そこでの〕アメリカ人グループの活動は継続された，と。

シャトフはこの結果に，党はソヴェト共和国の最高機関〔であり，その決定〕なので，大賛成した。ナジェジンスク工場の移管を急がせることは，いまやたいてい我々自身〔の努力〕次第である。第 1 に我々は工場を経営するためにアメリカから有能な実際家を得なければならない，と。

それを受けてリュトヘルスは言う。報告書を作成し，我々がその仕事を成し遂げることができることを当局に印象づけるのに必要な高位の技師を少なくとも 1 ないし 2 名は必要

（24） “Report and Financial Budget of the Kuzbas Industries. Endorsed by the Council of Labor and Defense, December, 1922,” *Kuzbas*, Vol. 1, No. 9, 20.I.1923, 2-3; cf. Morray, *Project Kuzbas*, 134.

（25） Rutgers, “A.I.K. Kuzbas,” РГАСПИ, 626/1/9/8-9; cf. Morray, *Project Kuzbas*, 184.

（26） РГАСПИ, 515/1/4297/13-14.

であろう，と。／……〔その技師選考に関してスカイラーは，キャルヴァートが候補者リストを持っている，と発言したことに対して，リュトヘルスは相変わらずキャルヴァートによる候補者推薦を好意的には受けとめていない。〕

議事録の後半には，「スカイラーの態度にシャフトが強く抗議する」とあり，文面だけでは具体的内容がつかめぬが，それはナジェジンスク工場への両者の関与の仕方に関するもので，両者の対立は他所でもあるものの，ここに面と向かっての対立が記録されている。

最後のパラグラフには以下がある。リュトヘルスはナジェジンスク工場の同志たちへ送られる声明〔未詳〕を読み上げる。ニキティンをニューヨークから届いた船荷をさばくためにペトログラートに行かせることが決定され，船荷の一部はナジェジンスク工場に他のものと一緒に届くだろう。詳細はニキティンに任される，と。

その翌々日，11 月 14 日には，上記第 2 回会議の投票で 3 対 2 で敗れ，さらに党中央委員会による「延期」の決定を受けたばかりのヘイウッドとスカイラーたちは，CTO 宛に以下の申立書を提出した[27]。

> 1922 年 11 月 11 日のロシア共産党中央委員会によって取られた行動のゆえに，末尾に署名した経営委員会委員および АИК-К 構成員は，以下を申し立てる：
>
> 1. コロニーの元々の契約および規則は変更なしに保たれるべきである。
> 2. このことは近い将来入植者たちによるロシアでの経営委員会の選挙を以下のように要求する：／……〔最初の契約締結前に CTO との合意にもとづいて作成された「組織および諸準備の規則」[28] の 2 パラグラフの繰り返しのため省略〕
> 3. 契約および規則はまた，アメリカにおける現在の組織委員会の存続を，以下のようにその仕事が完了するまで要求する：
> ……〔「組織および諸準備の規則」の関係する 2 文章の繰り返しのため省略〕
> 4. また我々は，すべての入植者が以下の諸準備に従って全くコロニー・ベースで考慮され，そして取り扱われることを求める：
> ……〔「組織および諸準備の規則」のうち傷害，病気，休暇，衛生状態，教育などに関する 1 パラグラフの繰り返しのため省略〕
>
> 〔以上，以下の署名者によって〕申し立てられる：
> (「クズバス」経営委員会委員）ヘイウッド／スカイラー／コスグローヴ
> (今モスクワにいる入植者）マスケヴィチ（J. Masukevich; 元 IWW サンフランシスコ支部所属，ベルグとともにナジェジンスク工場に最初に赴任）／アタナソフ（S. Atanasoff）／マルスキ（H. Marsky）／ベルグ

要するに現状維持以外の考えが全く示されていないこの申立書に対して，CTO からの回答はなかった。またリュトヘルスがどのように反応したかはわからないが，しかし彼はその直後の 11 月 18 日にキャルヴァート宛に書簡を送り，次のようにソヴェト政府関係

---

(27) РГАСПИ, 515/1/4296/26-27, 90-91; cf. Галкина, *АИК-К*, 64.

(28) РГАСПИ, 515/1/4296/54-54 об.; 515/1/4306/183-185.

機関との交渉でほぼ固まった変更点を踏まえた指示を早くも出していた。経営委員会からの要請なしには，誰もロシアへ派遣されえない；新契約の写しを準備でき次第，私〔リュトヘルス〕は送るつもりだし，リースがニューヨークでの事態を調整するための指示と全権を持って来るだろう；宣伝の時期は終わり，我々は仕事に取りかからなければならず，リースがナジェジンスク工場とケメロヴォ訪問後直ちに到着するまで，全出費を最低限に抑えなければならない，と[29]。

続いて 1922 年 11 月 21 日の АИК-К 管理機関の新旧委員による合同会議で，AOC 問題が以下のように最終的に決定された[30]。

リュトヘルスは，キャルヴァートとバーカーを信頼しておらず，AOC は解体されるべきであると主張した。シャトフは AOC の維持に賛成したが，しかしリュトヘルスは両者への信頼の欠如を理由にその主張を変えることはなかった[31]。

スカイラーは，コロニーへの視察旅行〔または操業参加〕でリースに同行する計画を〔自らの力添えは必要ないと判断して〕キャンセルしてニューヨークに戻ることになる。技術的に訓練された人員の募集は合州国で継続されることになり，新経営委員会は当地にその代表を持たなければならないので，リースがニューヨーク事務所の指揮をとる権限を持って送り返されることになる。

1922 年 11 月から 12 月にかけて〔新〕契約の個別条項がゴスプランでの審議で明確になり，АИК-К 指導者との打ち合わせで一連の変更が加えられ，交渉の結果が「РСФСР 政府と自治産業コロニー『クズバス』との間の契約締結のための基本テーゼ」にまとめられた。12 月 13 日に CTO は基本テーゼを受け入れることを決議した〔と言うことは，本件が決着した〕。BCHX にこれらにもとづいて新契約を 1 週間のうちに仕上げることが委任された[32]。2 日後の 12 月 15 日にリュトヘルスは AOC に打電した。「ケメロヴォの計画と信用貸しは承認された〔／〕委員会委員の再選を〔／〕次年度の作業詳細の提出を」[33]。

1922 年 12 月 25 日，ソヴェト・ロシア政府〔CTO〕と АИК-К との間で〔新〕契約が締結された。

（29） Morray, *Project Kuzbas*, 122-123; Галкина, *АИК-К*, 64.

（30） 以下はガルキナとモレイの説明によるけれども，両者には微妙な食い違いがあり，原文で確認する作業が残されている。Галкина, *АИК-К*, 64-65; Morray, *Project Kuzbas*, 123.

（31） リュトヘルスがバーカーだけを直に批判した文章は見つけがたい。バーカーは直言居士のようにリュトヘルスに対して厳しい発言をしているが（例えば， 第 2 篇， 20），バーカーの対極にいたリースの失脚後，リュトヘルスはバーカーの協力を必要としていく（後続篇）。

（32） Тарле, *Друзья страны Советов*, 316; cf. “Nederlanders bouwen,” 50.

（33） *Kuzbas*, Vol. 1, No. 8, 20.XII.1922, 12.

第 3 章　締結された新契約

新契約の全文は未見で，以下，前半では公刊された抜粋 (1) を逐次引用し，後半では抜粋されていない条項の一部を他の史料 (2) および諸研究によって紹介する。とともに新契約に関して『クズバス』に報じれられた 2 記事 (3)，「クズバス年譜」，そして諸研究によって補足説明をしていく。

第 1 条　シベリアとウラルにおける石炭および冶金業の最も好調な発展のために「自治産業コロニー・クズバス」と名付けられた国有企業が設立される。
　企業の管理機関はモスクワにある。
注釈　「自治コロニー」という語の下で，CTO に承認された規則を原則に生産および管理の最新方式の導入のため，管理機関の内部組織および生産機関における一定の自由を理解すべきである。

“Status” の冒頭に今回の「修正」ついての説明があり，要約するとこうである。АИК-К の現状は，元々の契約の中で最初に計画された時と，ソヴェト政府に関連しては本質的に全く同じである。クズバスの発想，理論，（生産組織としての実行を通じての）経験から，内部組織の一定の修正が必要となってきた。それゆえ当初の考えが修正された。結局のところ〔技術的にも社会的にも〕「効率」の向上こそがクズバスが確立するのを望んでいる原則であることが十分に理解されねばならない，と。

その「効率」向上のために第 1 にすべきことは，現実のネップ経済体制への適応であった。“Status” は，続けて説明している。「企業の司令部はモスクワにある」と明記されたのは，最初の契約（第 9 条）の責務は，1921 年の余剰生産に関して取り消され，今後クズバスは自ら自身の商品を市場で売買することを余儀なくされ，モスクワが流通の中心であり，そこに売買のために司令部を持つことが望ましいと考えられたからである。／その

---

(1)　*Кузбасс в период восстановления народного хозяйства 1920-1926 гг.*（Кемерово, 1966）, 114-116.

(2)　以下の史料集に載った「1922-23 経済年度のコロニーに関する АИК-К 管理機関の CTO 宛報告」（1924 年 1 月 8 日）では一部の条項が（正確な引用ではないが）紹介され，それぞれに対しての報告が続いている。“Деятельность «Автономной индустриальной колонии Кузбасс» и её оценка в документах СТО СССР (1922–1926 гг.),” *Исторический архив*, 1961, No. 3, 136-141.

(3)　“Status of the Autonomous Industrial Colony ‘Kuzbas’,” *Kuzbas,* Vol. 1, No. 11, 1.IV.1923, 8-9 [hereafter cited as “Status”]; “Present Status, Labor Turnover and Kuzbas,” *ibid.,* No. 12, 7.V. 1923, 1-2 [hereafter cited as “Present Status”].

ことはまた，〔最初の契約では明記されなかった〕“autonomous” の用語によって何を意味するかをヨリ明確に定義づけることが必要だとわかる。つまり，クズバスの多くの構成員は，ロシア諸制度の枠組み内での組織の自治としてではなく，産業内の彼らの行動における個人の認可（ライセンス）および個人の行動の自由として自治を解釈してきた。この解釈の結果として，大衆集会によってクズバスの諸産業を操業することや技術的問題に同じ方法で決着をつけることに努力が払われた。それによって，コロニーは明確な組織の状態に未だ達していないことを認め，当分の間，経営委員会の選挙を先送りし CTO によるその選出ないし指名を許すことが望ましいとみなした，と。

この説明によると，リュトヘルスは「ロシア諸制度の枠組み内での組織の自治」を当初から考えていたと見られ，実際 1921 年 6 月の「計画案」で「自治」の考えが初めて提示された文章には「労働者コロニーが自らの業務を管理する自由裁量（フリーハンド）を得ることは絶対に必須であろう」とあった（第 1 篇，9）。また，少しあとにリュトヘルがロシア経済生活の再建を援助するために文書「コミンテルンおよびプロフィンテルンの外国人救済委員会委員へ」で参加を呼びかけた АИК-К の募集案内では，「ソヴェト当局によって承認された経営委員会の下での内部組織における行動の自由（フリーハンド）」が謳われていた [(4)]。

АИК-К にとって喫緊の課題は，どのように組織内での自治を維持していくか，であろう。まず問題だったのは，自らの経営委員会委員の選挙権を手放したことである（後述）。残るは「下からの批判と管理が大いにできる自由」および「自主・自立への敬意」（第 1 篇, 26）に関することであろうが, АИК-К がそのことを守り抜こうとした例が挙げられる。1 つは「すべての入植者は，労働組合および直接コロニーの組織を通じて表現手段を持っている。彼らは直接，管理者と接触し，いつでも忠告や提案をすることができる」という上記「組織および諸準備の規則」中の条文を引き続き遵守しようとしたことであり，後述する。もう 1 つは，リュトヘルスのケメロヴォからの 1923 年 3 月 31 日付「組織報告」に以下のようにあり，生産の技術的「効率」の問題に深く関わっていた [(5)]。

> 我々の自治に関するもう 1 つのポイントは，もしも我々がアメリカ的方式を導入するならば，法律，特に鉱業法の全条項に従うつもりではありえないことである。もしもそれらの条項が有効なアメリカ的方式や実践と衝突するならば，マイナーな法律のある程度形式的な条項を無視する権利を我々の契約が我々に与えることを当然のことと思う。そのような場合，もちろん我々はその事実に当局の注意をうながすつもりだし，またある程度古くて使えない規則が公益のために変えられるようにすることによって貢献してもよい。

第 2 条　政府はコロニーに，クズネツク炭田とりわけケメロヴォにおける北部グループの石炭産地を，そこにある全施設および全資材（例えば，コークス炉，化学・煉瓦・製材などの工場）と一緒に（クズネツク炭田トラストの他の鉱山と全附随企

（4）　РГАСПИ, 515/1/4296/73-7.

（5）　S.J. Rutgers, “Organization Report,” *Kuzbas*, Vol. 1. No. 12, 7.V.1923, 6.

業のために明らかに取り置かれた電気工学資材を除いて）移管する。
　移管は，それらがあるところから独立した企業に関する全図面，図画，情報，そしてデータを含める。

最初の契約にあったナジェジンスク工場の移管については，第 4 条を見よ。

第 3 条　シベリア諸企業のコロニー管理機関への移管は，1922 年 10 月 1 日に行われたとみなされ，まさにその日から国有企業「АИК-К」が設立されたとみなされる……

最初の契約では，入植労働者の到着および操業開始の時期は決められず，契約当事者同士の債務目録も不十分だとわかった。АИК-К の設立日と決められた 1922 年 10 月 1 日まではケメロヴォはロシア人の管理下にあったのが，その日からアメリカ人への移管と規定されたものの移管はすぐには完遂されず，共同管理体制が続き，1923 年に入って 2 月に単独管理となり，АИК-К は国有企業合同体として承認され，経営委員会が直ちにすべての相応した権利を得た [6]。

第 5 条　「АИК-К」は国有企業であり，その生産物はすべて国家に属する。それは最高監督機関である CTO の全般的管理下にある。
　ВСНХ や他の人民委員部と「АИК-К」管理機関との間で生じた争いは，CTO が解決する……

後半は，АИК-К 創設の過程で ВСНХ との対立が早々と表面化した事情あっての条文であろうが（第 1 篇参照），CTO の「管理権」が規定されたことで АИК-К にとって憂慮される事態の処理策が成文化されたことになるものの，それが実務的に機能するかどうかは保証の限りではないだろう。

---

(6)　Тарле, *Друзья страны Советов*, 316-317. その移管に関する日付については，微妙なずれがある。ケネルによれば，2 月 1 日にクズバス炭田北部グループは，これまでのロシア人と入植者による共同管理からコロニーの単独管理へ移行されることが承認された。Kennell, “Lenin Called Us,” 89. モレイおよびガルキナでも，同日に CTO はすべての生産施設の管理をロシア人管理者からリュトヘルスへ移管することを承認した，と記されている。Morray, *Project Kuzbas*, 148; Галкина, *АИК-К*, 83. しかしタルレでは，1 月 16 日からケメロヴォの諸企業は新契約に従って事実上 АИК-К に移管されたけれども，実際の移管は遅れて 2 月 23 日に完了したとある。Тарле, *Друзья страны Советов*, 319-320. 活動開始日についても，タルレは断定できないと断りながら「通常 3 月 1 日」とみなしたが，ガルキナはクズバス・トラストと АИК-К が移管協定書に署名した 3 月 4 日とみなしている。Галкина, *АИК-К*, 67; cf. “Деятельность АИК...1922-26,” 136. これらを見ると日付の確定は困難なように思えるが，リュトヘルスの記述でも「2 月 1 日」を区切り日としており（РГАСПИ, 626/1/6/18），本篇も同様に扱うことにする。

第 8 条　「クズバス」のために，……すべての基本テーゼと規則が拡大される。
注釈　遅くとも 1923 年 4 月 1 日までに「クズバス」管理機関は，BCHX との合意に従って CTO の承認を求めて，……「クズバス」に関する基本テーゼ案を提出しなければならない……

上記「1922-23 経済年度報告」によれば，規則案は一度は 1923 年 8 月に提出されたものの，企業移管の遅れもあり，ようやく 1924 年 1 月 8 日時点で承認の段階にあるとのことである。基本テーゼについての言及はなく，果たして提出されたのかどうか，確認できない [7]。

第 10 条　入植者たちは〔以下に挙げる〕義務を負う……
1）アメリカからロシアへ遅くとも 1924 年 6 月 1 日までに 1,000 人の完全な有資格の技術労働者・職員をシベリアの企業のために送り届ける。……
2）引き渡された企業に雇われている地元労働者の作業の履行を，……労働条件，管理機関によって定められた規準や規律，そして労働報酬の原則に関して，アメリカ人労働者と同等の原則で要求する。
3）企業の操業のために必要な装備品，資材などを加入労働者各人につき少なくとも 100 ドルの自己負担で買い込む。
4）企業の機械，道具，その他の材料のための購入を，この品物への支出額が外国での「クズバス」の他の支出と一緒に 50 万金ルーブリを超えないように組織する。

アメリカから入植者数は 5,800 人から 1,000 人（既入植者を含む）に制限された。上述のように，ソヴェト・ロシア政府による多額の財政支援の問題から早々とこの規模縮小は取り沙汰されていた。“Present Status” によれば，АИК-К 側も婦人と子供の数を減らし，現地の親類や友人から住居などの窮状の情報を得ていない者は渡航すべきではないと考えるものの，新契約下でクズバス行を希望する人数から，最も望ましいタイプで，クズバス組織が要求するような技術を持つ約 300 人（主に鉱山労働者と技術者）が徹底的に選抜されるであろう，と楽観的すぎる判断を下していた。

ここで АИК-К の財政について少しく敷衍して述べれば，ソヴェト政府の財政債務は，ゴスプランの反対にもかかわらず増加して，АИК-К に 200 万金ルーブリが（うち機械，道具，資材購入のために前もって決めておかれた 50 万〔金〕ルーブリはアメリカの通貨〔25 万ドル〕で）支給されることになった。この 200 万金ルーブリは，『クズバス』1923 年 1 月 20 日号に載った上記予算報告の中で以下のように積算されている [8]。

（7）“Деятельность АИК...1922-26,” 137.
（8）“Report and Financial Budget of the Kuzbas Industries,” 1-4.

初年（1922 年）度　支出 270 万，収入 150 万，赤字 120 万　　（単位は金ルーブリ）
2 年（1923 年）度　要求額：
前年度分赤字 120 万 ＋ 2 年度第 1 期分 50 万 ＋ 流動資本 30 万 ＝ 200 万

しかし，リュトヘルスによる明解な説明によれば，50 万金ルーブリ（25 万ドル）については，以前の契約で割り当てられた 30 万ドルから使われずに残った 22.5 万ドルが勘定に入れられた。従って，АИК-К は新契約では追加として 5 万金ルーブリ（2.5 万ドル）が移った〔にすぎない〕[9]。

リュトヘルスは上述の 10 月 24 日付書簡で，高い目標を実現する好機であるにもかかわらず投入資金が少ないことをレーニンに訴え，末尾に「個人的に数分間話すことが是非必要です」と記していたが，レーニンは 12 月 13 日朝に病気の発作が再発し，前日がクレムリンでの最後の執務となった。13 日の早朝，レーニンが残した 6 行のメモ書きの 2 番目に「リュトヘルス...」とあった[10]。1 年前の最初の契約時におけるレーニンの強力な後押しの再現はなく終わった。

第 11 条　他国からロシア国境までの移民と彼らの荷物の輸送は労働者の資金で行われ，ロシア国境から指定地までの輸送はソヴェト政府の責任であり，軍事−緊急態勢で行われる。
　機械，資材，食糧の輸入は無関税，間接税やその他の賦課税なしで行われなければならない。これら輸送の特権および現金なしの権利のすべてが，……資材にも貨物にも当てはまる……

АИК-К は外国からの輸入に対してあらゆる税免除の特権が与えられた。

第 3 条第 3 項　「クズバス」は，1923 年 1 月 15 日までに実際に企業移管する条件の下で，4 月 1 日に資産目録および開始時の貸借対照表を作成しなければならない。
〔説明〕それらは実際に 1923 年 4 月 1 日作成される[11]。

第 4 条　ナジェジンスク工場およびその管理下にあるような企業の再組織案の作成のためにアメリカから有能な専門技師を呼び寄せる義務を負う。
〔説明〕彼ら専門技師によって同工場の再編および操業の計画案（大規模製鋼プラントを含む）が作成され，それが評価されるまで，その決定は延期され，しかも実際の移管は次の操業年度（1923 年 10 月 1 日）より早くなってはいけないことになった[12]。

（9）　Тарле, *Друзья страны Советов*, 319, cf. 322.
（10）　*В.И. Ленин. Биог. хроника*, Т. 12, 536.
（11）　“Деятельность АИК...1922-26,” 136.
（12）　“Status”; РГАСПИ, 626/1/6/16; Генкина, *Ленин*, 163.

早くもリュトヘルスは1923年5月30日時点で「我々の財政的および技術的資源がまだ十分に適切でないので，ナジェジンスク工場を引き受けることを再び延期することが示唆されてきている」とAOCに報告する[13]。続いて「クズバス」管理機関は，ケメロヴォ地区で全技術力とエネルギーをすでに受け入れられた諸企業に集中しなければならないので，CTOにこの問題の審査を〔再度〕1年間延期することを求めることになり，そのことは6月29日の決議で承認されることになる[14]。

第13条　生産計画（プログラム）が全産業計画（プラン）との調整のためにBCHXに提出されなければならない。（タルレによれば，第19条にBCHXがАИК-Кの管理権を得たとあり，コロニーの生産計画はBCHXの承認および全般的な経済計画との調整が必要となる[15]。両条文の重なり具合が確認できない。）

〔説明〕「クズバス年譜」には「CTOの下での従属関係は毅然として維持されるが，しかし組織のやり方〔作業の方式や組織化〕に干渉する権利が与えられることなしだがBCHXが管理権を得る」と記されてはいるものの[16]，本条文はBCHXからの影響がАИК-Кに益々及びやすくなったことを意味するであろう。

条文番号は不明だが，以下の条項があるとのこと。

①入植労働者への賃金は創設時から現物支給だったが，職種・資格に応じて17の等級（カテゴリー）に区分されたロシア人労働者の賃金制度が導入された[17]。「ヨリ多くサンディカリスト的な見解を抱く数人（ママ）のアメリカ人はそれに反抗したが，実施にあたって大した困難をもたらさなかった」[18]。現物支給はコミューン型コロニーの1典型だったのだが，この導入もまた，上記第1回会議でのリュトヘルスの発言のように，АИК-Кの発展にはネップの経済体制への適応が求められていたからである。けれども，それが入植者の収入に及ぼした影響は限定的であった。なぜならば，賃金の60％は食事，洗濯などの共同生活基金に入れられ，現金支給は残りの40％であったからであり[19]，（ケネルの夫フランクが1923年6月頃に執筆したケメロヴォ便りによれば）この導入が最終的にケメロヴォの鉱山労働組合アメリカ人セクションで決められたものの，その際「共同生活の本質的特徴」である同基金は維持されたのである[20]。なお，実際には数年間実現不可能と考えられていたボーナスの基本方針は，生産増大に伴う賃金増額に取って代えられることになった（“Status”）。

（13）　Rutgers, “Report on Kemerovo,” *Kuzbas*, Vol. 2, No. 2, 29.VII.1923, 2.

（14）　“Деятельность АИК...1922-26,” 136-137.

（15）　Тарле, *Друзья страны Советов*, 318.

（16）　РГАСПИ, 626/1/6/16.

（17）　Галкина, *АИК-К*, 83.

（18）　РГАСПИ, 626/1/6/19. 反抗した「彼らは1社会主義企業において『賃金』を受け取ることに甘んじることができなかった」。Rutgers, “Kurze Übersicht,” РГАСПИ, 626/1/6/74.

（19）　Cf. Morray, *Project Kuzbas*, 126.

（20）　F. Kennell, “What is Kuzbas?” *Kuzbas*, Vol. 2, No. 3, 30.VIII.1923, 9.

②組織における第 1 の変更点は，委員会委員を 14 人から 3 人に縮小したことである。その変更は，（形式的には）上記第 2 回会議での決定が CTO に要望されたことによるものであり，CTO は 1922 年 11 月 15 日にリュトヘルス，リース，そして CTO 代表（シャトフの名前がないのは，しばらくの間不在のため）から成る新管理機関を承認した。12 月 20 日に同議長に選ばれたリュトヘルスがケメロヴォの管理者となり，リースがナジェジンスクの技術調査と組織とを委ねられ，残りの CTO 代表（のちにコトリャレンコ〔Д. Котляренко〕が着任）がモスクワのクズバス組織を代表することになった[21]。

その 3 名の経営委員会委員の選出は，コロニーが明確に組織され，入植者自身による選挙が可能になるまでの暫定措置と考えられていたのだが（“Status”; “Present Status”），実際はその措置（その中には CTO による委員罷免権も含まれていた）によってソヴェト政府への依存度は高まった。思い起こせば，АИК-К 創設をめぐる大詰めの交渉で組織委員会への追加の候補者の参加権をソヴェト政府が持つことが加えられ，レーニンは「これは全権委任ではなく，『組織委員会』の人事に異議申立をする権利だけはある」と言っていたのだが（第 1 篇， 24），なんと事態は短期間に変わってしまったことか。АИК-К は自らの選挙権を取り戻すことなく，まさにソヴェト政府が持つその人事権に最後まで振り舞わされていく（後続篇）。

アメリカでの作業については，1 個人に責任を負わせることによって最もよく実行できる，と新経営委員会は考え，AOC を 1923 年 4 月 1 日をもって解散することを決定し，その責任者に一時的にリースを任命した（“Present Status”）。そのリースの選出および任命問題は尾を引いた。つまり，AOC 委員の中にリュトヘルスの考えおよび行動を十分に理解し，協力できる力量のある人材はおらず[22]，リースにはナジェジンスク工場の技術調査は無理で，同工場の再計画案の作成も進めようがなく，また AOC でのそれまでの実績も乏しい彼の力量にも不安があり（次篇），人材不足は致命的であった。

「クズバス年譜」の本件のまとめの記述は，こうであった。「この規定によりヘイウッドは管理機関から排除され，そして AOC は単なる 1 技術機関に格下げされ」，再編され，「キャルヴァートも締め出された。モスクワでのスペッツとの闘争は 2，3 カ月続いた。指導的な党同志たち（その中にレーニンもいた）は（更なる建て直しのために健全な基礎を築く）新規定を押し通した」[23]。この文章からは，新契約による規定をリュトヘルスが手放して喜んではいないことがわかる。レーニンにもわかってもらえなかった残念な気持ちも。

（21） Тарле, *Друзья страны Советов*, 318; cf. РГАСПИ, 626/1//11/17.

（22） スカイラーについては，リュトヘルスと意見が分かれただけでなく，「ナジェジンスク工場のための計画案の作成に共同したスカイラーは，我々〔リュトヘルスら〕によって実際の役に立たない（unpraktisch）として拒まれた」。РГАСПИ, 626/1/6/17.

（23） РГАСПИ, 626/1/6/16（強調引用者）.

第 4 章　締結後の再出発

新契約締結直後の 1922 年 12 月 28 日，リュトヘルスは（視察旅行の）リースとコスグローヴを伴ってナジェジンスク工場とケメロヴォへ向けてモスクワを発った[(1)]。

出発に先立ち，締結前の 12 月 21 日にリュトヘルスは，（CTO ではなく）党中央委員会書記（クイブィシェフ〔В.В. Куйбышев〕）が作成した以下の証明書を受け取っている。「本状持参人である自治産業コロニー（クズバス）管理機関議長は，クズバス地区での活動のために出かける。／ロシア共産党中央委員会は全党機関および党員に，中央委員会が大きな政治的意義を付与しているところの企業での指導において，同志リュトヘルスに最大限の援助を与えるよう依頼する」[(2)]。

ナジェジンスク工場視察後，ケメロヴォに着く前に短期間ノヴォニコラエフスクに滞在した一行は，クズバス・トラストの管理者バジャノフと引き継ぎに関して協議した[(3)]。

1923 年 1 月半ばにリュトヘルスらはケメロヴォに到着した。その直後に開かれた入植者集会で，「クズバス年譜」によれば，リュトヘルスは新しい情勢を報告し，「活発な議論があったが，しかし大多数は新政策に同意した。30 人のグループ（たいてい IWW 信奉者）はコロニーを去ることに決めた」[(4)]。しかし，その「活発な議論」の中身は紹介されておらず，“Present　Status” では次のように説明されている。「当地の労働者の大多数は，彼らの意見の相違があまりに著しかったので，〔彼らの〕能力にもとづいて彼ら自身の経営委員会を選挙することは不可能であろうと認めて，当分の間必要な一歩として上記〔リュトヘルスらによる〕取り決めを受け入れた」。

1 月 16 日の晩に開かれた技術スタッフの会議でリュトヘルスが報告したことについて，ルース・ケネルは 2 月 12 日付クズバス便りで次のように報じている[(5)]。「『モスクワはクズバスを 1 ソヴェト国有企業とみなし，アメリカ方式で操業し，そして不運にもアメリカ人を必要としている』。このようにリュトヘルスは……全クズバス・プロジェクトをユーモアを交えて要約した」。しかし，ケネルの続く文章は新契約に批判的である。つまり，「……コロニーの IWW にとって特別に関係する新契約の 1 条項は，クズバスの全構成員がロ

（1）　*Kuzbas*, Vol. 1, No. 10, 20.II.1923, 9; cf. “A Visit to Kuzbas,” *ibid*, No. 11, 1.IV.1923, 1-3.

（2）　“Организация АИК-К...1921-1923,” 97（強調引用者）. その 2 日後の 12 月 23 日にリースも，早々とアメリカ行の委任状（CTO 議長代理ルィコフ署名）を受け取っている。Галкина, *АИК-К*, 65.

（3）　РГАСПИ, 626/1/6/17.

（4）　РГАСПИ, 626/1/6/17-18. ガルキナも「30 人の入植者が辞職した」と記しているが（Галкина, *АИК-К*, 83），後述の別箇所では，女性 5 人，子 7 人を含めて 37 人となっている。

（5）　R.E. Kennel, “Kuzbas: A New Pennsylvania,” *The Nation*, Vol. 116, No. 3017, 2.V.1923, 511.

シア労働組合に所属しなければならない，と明記している。もう 1 つの条項は，CTO にだけ責任を負う経営委員会が絶対的独裁者（absolute dictator）であり，入植者がクズバス業務の管理にいかなる声もあげられないことを明記することによって，АИК-К から実際に『自治』を取り去っている。彼らは提案してもよいが，しかしいかなる苦情も全員参加〔つまり大衆集会〕を通じて提出されなければならず，それもまた共産党の支配下にある」と。

1 つ目の条項については，上記「組織および諸準備の規則」にすでにあり，ソヴェト・ロシアで，しかも国有企業で働く労働者にとって組合加入は当然のことであり，（IWW 的立場からも）特段問題にしにくい。2 つ目については，かなり硬直した理解と言わざるをえない（その後の АИК-К の運営を後続篇で見ていくと，確かに同規則は空文化していくのだが）。同規則（それは AOC の派遣労働者募集用小冊子にも再録された [6]）には，こうある。「経営委員会は技術スタッフを任命・解任し，後者もまた前者の助言者として行動すると同時に，全労働を監督するものとする。〔コロニー〕一団（ユニット）の全労働者は各自の労働組合に所属し，労働組合は再び経営委員会および技術スタッフに対して助言的権能を持って行動するものとする」。

新契約に対応する規則は，上記のように案自体の提出が遅れており，“Present Status” に「すべての入植者は，労働組合および直接コロニーの組織を通じて表現手段を持っている。彼らは直接，管理者と接触し，いつでも忠告や提案をすることができる」とあるように，最初の規則が通用していたものと見られる。さらに言えば，それこそ第 1 条で謳われた「自治コロニー」を保障する不可欠な条文であったろう。確かに，その条文は理想的すぎるかもしれないが，しかしそれらの関係が機能した例は挙げられる。第 1 陣でやって来た化学技師スパークスの回想には，こうある。「彼〔リュトヘルス〕は〔現地で〕指揮する経営委員会の唯一の人であり，たとえ合意が得られなくても企業のすべての方面から少なくとも必要最低限の尊敬を受けていた」。そのリュトヘルスが技術スタッフであるスパークスらによって繰り返された進言により石炭産出第一からコークス製造重視へと方針転換した [7]。

先に取り上げた大衆集会の問題に対するリュトヘルスの（「専門技術者の独裁」と見られてもやむを得ない）対応に関しては，以下の研究者の総括が〔少なくとも 1923，24 年時点では〕妥当であったろう。リュトヘルスは「些細な日常の諸問題をめぐる果てしない会議や言い争いをやめさせた。どんな問題でも集団によって決定されるべきだと信じる多くの労働者の不満に対して，リュトヘルスは自らが決定を下し，彼らが問うまでもなく従うべきだと主張した。コロニーにとって幸いなことには，彼は正しい決定を下した。彼は

（6） *“Kuzbas.” An Opportunity for Engineers and Workers. Prospectus*（New York, 1922）, 31.

（7） N. Sparks, “Lenin and the Americans at Kuzbas,” R.S. Cohen/J.J. Stachel/M.W. Wartofsky (eds.), *For Dirk Struik. Scientific, Historical and Political Essays in Honor of Dirk J. Struik*（Dordrecht/Boston, 1974）, 625, 626-627. 本回想は以下の増補改訂版である。かなりのパラグラフが増補され，わずかだが削除もある。Id., “Lenin and the Americans At Kuzbas,” *New World Review*, Vol. 39, No. 4, Fall 1971, 71-86.

たいへん尊敬されるようになったので，彼が 1925 年〔初め〕に〔健康を害して〕去ることを求めた時にはすでに誰も彼が行くのを見たくなかった。彼は厳しかったが，しかし公正であり，最も重要なことだが，すばらしい経営者であった」[8]。

「リュトヘルスは以前〔新契約交渉に臨む際〕ケメロヴォの労働者に，何がなされるべきかを要求するかを尋ね，提案を求めていた」（“Present Status”）。その一方で，彼が頻繁に現地を留守にしながら中央のソヴェト政府諸機関および地方の関係諸機関といかに苦労して交渉を重ねていたかを，第 4 陣でのケメロヴォ到着から 5 カ月半しか経っていない時点で執筆したケネルが把握していたかは疑問に思える。彼女自身の政治的立場も，モレイによれば，当初の IWW 支持者への一体感から，新契約から生じたリュトヘルスの改革および実用主義的なコロニー体制の受容へと徐々に変わっていき，リュトヘルスとの間に信頼関係〔その感動的なエピソードは後続篇で紹介されるであろう〕が形成される[9]。

リュトヘルスがケメロヴォ到着後，すぐに取り組んだもう 1 つの行動は，〔最低〕2 年の契約期間を待たず現地を去る者の解放であり，〔契約破棄にもかかわらず〕帰路国境までの不自由のない乗降を保障し，ひと月分の食糧を提供したことだった[10]。ガルキナによれば，1923 年 2 月 8 日に（失望した IWW 組合員ら）37 人の入植者（うち女性 5 人，子供 7 人）がケメロヴォを去った。これはグループとして組織された第 2 弾であって，第 1 弾では 1922 年 9 月 4−5 日に（人数把握に差があり）最小で 17 人，最大で 30 人が去った。1923 年末までにグループ数は 9 に増えて，合計 176 人が去り，その人数は同期間に入植した総数 581 人（第 2 篇, 30, 32）の 3 割を占めた[11]。

上述のように，1923 年 2 月 1 日に АИК-К は共同管理から単独管理へと移行することが承認され，3 月 1 日が正式な活動開始日となった。そして 4 月 1 日には完全移管される資産目録および貸借対照表が作成され，再出発する АИК-К の本格的操業が始まっていくのである。

（8） Paula Garb, *They Came to Stay. North Americans in the U.S.S.R.*（Moscow, 1987）, 22.

（9） Morray, *Project Kuzbas*, 163-164.

（10） Cf. Morray, *Project Kuzbas*, 126.

（11） Галкина, *АИК-К*, 66. 同じくガルキナによれば，離脱の主な理由は，以下である。①コロニーの生活が目的にかなっているとの自信をなくしたこと；②個人的な目的を達成できないこと；③労働組合との争い；④賃金の 60 %を共同生活基金に入れるのに気が進まないこと；⑤過酷な労働および住居−生活条件；⑥厳しいシベリアの気候。

お わ り に

リュトヘルスは 1923 年 8 月頃に АИК-К の設立日から 10 カ月にわたる各部門の詳細な報告をまとめ，その冒頭に以下のように記していた [1]。

> ……すべての報告において〔1922 年〕10 月 1 日から〔1923 年〕2 月 1 日までの期間は，古いロシア人管理側からの妨害の 1 つとして，また新方式の導入あるいは古い「秩序」へのシステムの持ち込みは言うまでもなく，作業を調整することは不可能だとして描かれている。アメリカ人労働者はこの時期いかなる給料もなしに働き，専門技術者はロシアの諸条件に自らを通じるように試みたが，しかしいかなる影響も企業経営に全体として及ぼせなかった。1923 年初めの状況は，完全な破局に非常に近づいていた。／アメリカ人の手への経営の移譲と必要資金の割り当て後，再建の時期が機械導入のための必要な準備として始まった。……

そこには本篇がおおよそ取り扱った時期が端的に表されていた。

АИК-К は操業開始期において様々な問題に遭遇した。まず，バイアー，ヘイウッド，そしてリュトヘルスが現地管理者として順にケメロヴォへ赴いたが，彼らの中でも管理をめぐる考えや仕方で違いが生じ，バイアーは半ば離反していき（そして急逝し），ヘイウッドはリュトヘルス着任後早々と現地を去り，新契約締結前に反対側に転じ，そしてリュトヘルスが唯一の管理者として事業を継続することになった。またソヴェト・ロシア政府機関，特にゴスプランによって早々と АИК-К の規模縮小，さらには最初の契約条件の改変を求める新契約締結が提案され，リュトヘルスらはその交渉に向けて対応に追われることになり，AOC のスカイラー，リースらも訪露して，その対応に協力することになった。けれども，ここでも意見が分かれ，内部対立が生じてしまった。かくしてその内部対立は АИК-К の組織委員会および AOC の清算を招くことになった。

新契約によって何がどのように変わったか，どのような問題があったか。以下，研究史上見落とされてきた視点および新解釈を提示しながら，主要問題をまとめ直して論じることにする。

（1）「自治」の問題

技術的にも社会的にも「効率」の向上こそが АИК-К が確立しようとした原則であり，その「効率」を高めるために第 1 にすべきことは，現実のネップ経済体制への適応であった。まず АИК-К の司令部が，売買のために流通の中心であるモスクワに置かれた。その

（1） S.J. Rutgers, “Report on Kemerovo Industries A.I.C. Kuzbas Oct. 1, 1922 to July 31, 1923,” *Kuzbas*, Vol. 2, No. 4, 1.X.1923, 1-2.

ことはまた,「自治」の用語によって何を意味するかを明確に定義づける必要が出てきた。多くの入植者は，ロシア諸制度の枠組み内での組織の自治としてではなく，産業内の彼らの行動における個人の認可（ライセンス）および個人の行動の自由として自治を解釈してきた。この解釈の結果として，大衆集会によって АИК-К の操業や技術的問題に決着をつけることに努力が払われた。それによって，コロニーは明確な組織の状態に未だ達していないことを認め，当分の間，経営委員会の選挙を先送りし，CTO によるその選出ないし指名を許すことになった。

リュトヘルスは「ロシア諸制度内での組織の自治」（「内部組織における行動の自由（フリーハンド）」）の方を当初から考えていたのであり，その組織内での「自治」を維持していく上で，以下に掲げる問題が生じた。① АИК-К は組織委員会内の意見対立のゆえに，同委員会から 3 人経営委員会へと改変し，自らの経営委員会委員の選挙権を暫定的に手放したこと。②全入植者の「助言的権能」つまり「忠告や提案」の自由を保障する「規則」の条文が空文化していると批判されたこと。③「自治」を保障する 1 形態として重要視される大衆集会が，特に生産の技術的「効率」の観点から批判されたこと。

以上 3 つの問題について，逐次論じることにする。

①経営委員会の改変および選挙権の移譲

14 人の組織委員会が清算され，3 人（リュトヘルス，シャフト，そしてリース）から構成された経営委員会は，АИК-К 組織委員会と AOC の委員たちによる合同会議でシャトフによって提案され，3 対 2 で採決され，そして CTO へ上申された。そこで気になるのは，CTO からの代表であるシャトフが提案したことであり，その背後で CTO の意向が働いていて，АИК-К の自立性が損なわれる可能性がありえたかもしれないということである。たとえそうだとしても，リュトヘルスがそれに同意したのは，以下のような彼独自の考えがあったからではないか。つまり，「今の管理機関の中には様々な意見の違いがあり，それが実際の生産への準備のための作業にブレーキをかけるであろうから」と CTO 宛書簡にあるように，生産の「効率」問題こそが彼にとって優先事項であったのであり，彼にはその効率に響くであろう内紛がソヴェト・ロシア経済復興への支援という大義のために支障をきたしかねないという考えがあったのではないか。

なるほど新経営委員会委員の選出は，コロニーが明確に組織され，入植者自身による選挙が可能になるまでの暫定措置と考えられていたのだが，しかし実際はその措置（その中には CTO による委員罷免権も含まれていた）によってソヴェト政府への依存度は高まった。АИК-К は自らの選挙権を取り戻すことなく，まさにソヴェト政府が持つその人事権に最後まで振り舞わされていく（後続篇）。

②「下」からの意見，批判などの自由の保障

ルース・ケネルは，新契約での改変により「CTO にだけ責任を負う経営委員会が絶対的独裁者であり，入植者がクズバス業務の管理にいかなる声もあげられないことを明記することによって，АИК-К から実際に『自治』を取り去っている」と主張した。しかし，以下のように反論できるであろう。上記「規則」条文は理想的すぎるかもしれず，実際のちに空文化していくのだが，少なくとも当初は有効であった。その例が次のようにある。技術スタッフである化学技師スパークスらによる進言により管理者リュトヘルスは石炭産

出第一からコークス製造重視へと方針転換した。また，「リュトヘルスは以前ケメロヴォの労働者に，何がなされるべきかを要求するかを尋ね，提案を求めていた」。ケネルは上記の批判文章をケメロヴォ到着から 5 カ月半しか経っていない時点で書いたのだが，実は彼女自身の政治的立場も，当初の IWW 支持者への一体感から，新契約から生じたリュトヘルスの改革および実用主義的なコロニー体制の受容へと徐々に変わっていき，リュトヘルスとの間に信頼関係が形成されるのである。

③大衆集会 対 技術的効率

リュトヘルスは現地到着早々，大衆集会の問題点，例えば細部の技術的問題をも大衆集会で決めることの非効率を取り上げ，「一定の規律」を導入して改善しようとした。その試みは IWW 支持者の反撥を招いたけれども，リュトヘルスがこだわったのは技術的「効率」の問題，つまり専門技術者による産業経営の不可避性であり，そのことを当の IWW 機関誌（*Industrial Worker*）に載り，『クズバス』に転載された論文「労働者管理」の中の「生産に関する限り，プロレタリアートの独裁よりはむしろ専門技術者のある種の独裁になるかもしれない」という主張が後押していたのである。

その技術的「効率」優先の方針は，「もしも我々がアメリカ的方式を導入するならば，法律，特に鉱業法の全条項に従うつもりではありえない」と「マイナーな法律のある程度形式的な条項を無視する権利」をもリュトヘルスをして主張させた。

（2）ネップ期の経済体制への「適応」の問題

①「商業的トラスト」の拒絶

リュトヘルスは，ソヴェト・ロシア政府諸機関との交渉の中で АИК-К をロシアの通常の「商業的トラスト」（別言すれば「利益配当のある協同組合形態」〔第 1 篇， 17〕）に変えることを断固認めようとしなかった。リュトヘルスらが立てた「自治コロニー」の原則とは，国有企業であり続けたコロニーの入植者に対して国家は生活条件および企業の発展可能性を保障することであったからである。けれども，賃金制度の導入，選挙権の移譲などによって АИК-К は，その 1 年前とは確かに様変わりしつつあった。

②「適応」の評価について

ネップ期の経済体制への「適応」を主目的とした新契約により，計画を規模縮小し，その一方で管理一元化を果たすまでの АИК-К を，ガルキナは次のように総括している。「АИК-К は『興奮，ロマン，冒険』の期間を耐え抜き，『新ペンシルヴェニア』の建設を企てながら『復興の仕事に着手した』」と[(2)]。ガルキナにとっては，既述したように（第 1 篇， 28）「コロニーのロシア化」の流れが当然視されており，АИК-К がめざした「自治コロニー」を原則とした言わば「産みの苦しみ」は正当に評価されず，ようやく本格的な操業が始まったとしか見られていない。それゆえ，その流れに沿わない史実の追究への目配りが，ガルキナには足りない。

（2） Галкина, *АИК-К*, 69（傍点引用者）.

とは言え，元来クズバス・プロジェクトは，ロシア経済の復興・発展に寄与することが大義であったのだから，ソヴェト・ロシア政府諸機関の АИК-К への積極的な支持が得られない以上，リュトヘルスにとってはネップ下の経済発展に沿う制度改変は避けられなかったし，実際その方向性しか АИК-К の経済的発展の選択肢はなかったろう。当初リュトヘルスが夢描いていた新しい労働者国家（或る入植者の表現では「新労働者共和国」）の形成[3]は消え果て，残るは АИК-К 組織内での「自治」にもとづき，生産の技術的「効率」を可能な限り高めながら，経済発展をいかにめざしていくかだけであったろう。

2024 年 6 月 14 日　成稿・初版

（3）　第 1 篇, 28; “A Letter from Siberia,” *Kuzbas*, Vol. 1, No. 7, 20.XI.1923, 8.

The Autonomous Industrial Colony "Kuzbas" and S. J. Rutgers (3):

From the Preparation for the Start-up of Operations to the Restart after a New Contract

by

Akito YAMANOUCHI

(Professor Emeritus of Kyushu University)

The Autonomous Industrial Colony "Kuzbas" (AIC-K) encountered various difficulties at the start-up of operations. As its manager J.H. Beyer, W.D. Haywood, and S.J. Rutgers left in order for the destination, Kemerovo. But a difference of views and ways over the management arouse among them, so Beyer nearly broke away (and died suddenly), Haywood left there soon after Rutgers' arrival and turned around on the opposite side, and Rutgers came to continue as sole manager. And by the Soviet governing bodies, especially the Gosplan, the scale reduction of the AIC-K project was requested and the making of a new contract was proposed in order to modify the first contract terms. Rutgers and other members of the Organization Committee (the provisional Managing Board) were obliged to conduct negotiations with the Gosplan, the Soviet of Labor and Defense (STO), etc. Three members of the American Organization Committee (AOC) also left New York for Russia and worked together. At this point over how to respond to the proposal, however, the opinions of members in both Committees were also divided and the internal opposition strengthened. That internal opposition created a stir and brought about the liquidation of both the Organization Committee and the AOC.

The AIC-K concluded the new contract with the STO on 25 December 1922, achieved the transition from the joint management with the Russians to the single one on 1 February 1923, and re-started the official operations on 1 March 1923, which were to be the beginning of full-scale operations.

What and how did the new contract change? What kind of problems did it cause? Here I will summarize and examine the major problems from new angles and interpretations which have been passed unnoticed up to now.

1. On the term "autonomous"

The developing technical and social efficiency was the principle which the AIC-K aimed at establishing. In order to develop the highest possible efficiency, the AIC-K began by adapting itself to the current economic system, the NEP. First, the AIC-K established its headquarters in Moscow as the center of distribution for purchasing and selling purposes. It was also found necessary to define more clearly what is meant by the term "autonomous." Many members of the AIC-K had interpreted "autonomous" as individual license and individual freedom of action in

their conduct in industry and not as the autonomy of an organization within the framework of Russian institutions. As a result of this interpretation an effort was made to operate the industries of the AIC-K by mass meetings and determine questions of technique in the same manner, Therefore, recognizing that the AIC-K had not arrived at a condition of definite organization, it was deemed advisable to defer for the time being the election of a Managing Board and allow of its selection or appointment by the STO.

From the start Rutgers aimed at the autonomy of an organization within Russian institutions. While the AIC-K was making an effort to enjoy the autonomy, it carried the following problems: (1) Due to the difference of opinions within the Organization Committee, that Committee of 14 members was discharged and the Managing Board of 3 (Rutgers, V.C. Shatov, and Th. Reese) was formed. Besides the AIC-K provisionally devolved the right to election on the STO; (2) It was criticized that the clauses of its statute, securing the advisory capacity, that is, all colonists' freedom of advice and proposal, became invalid; (3) The mass meeting which had been regarded as an important form for securing the autonomy was criticized especially from the viewpoint of the technical efficiency of production.

Those problems are examined in order:

(1) The forming of the Managing Board and the devolving of the right to election

The liquidation of the Organization Committee and the forming of the Managing Board was proposed by Shatov at the joint meeting of the Organization Committee and the AOC, adopted by a vote 3 against 2, and submitted to the STO. What weighs on my mind is that the proposer was a representative from the STO, Shatov, so that there was a possibility that the STO's intention had been indicated at the back of the proposal. Nevertheless, it is supposed that Rutgers agreed with the proposal with his own intention. He (and Reese) sent the following letter to the STO on 30 October 1922: "The proposal is important because among the members of the present governing board there is a difference of opinions which will brake the work for the preparation of production." That is, for Rutgers the efficiency of production was a question of the highest priority. Therefore, he was very anxious about the internal discord which might decrease the efficiency and, what is worse, interfere with the AIC-K's cause of supporting the economic recovery of Soviet Russia.

Indeed, the election of 3 members of the Managing Board was an interim measure so far as the colonists themselves could not afford to elect those members. But the AIC-K could not regain the right of election and came to be at the mercy of the Soviet government concerning the right of personnel management to the end.

(2) The security of freedom of opinion, critique, etc. from the bottom up.

On alterations in the new contract R.E. Kennelll argued, "Another clause practically takes the 'autonomous' out of "the AIC-K" by specifying that the management board, responsible only the STO, is absolute dictator and the colonists have no voice in the administration of Kuzbas affairs." But I argue against as follows: Indeed, the clause on the security of that freedom was too idealistic and became invalid, but it had been valid at least at the start. The following is an example: Through the advice of chemical engineers N. Sparks and others, the manager Rutgers

switched a fundamental policy from producing coal first to manufacturing coke emphatically. Also "Rutgers had previously asked the workers at Kemerovo what they required to be done at Moscow and had asked for suggestions." Kennell wrote the above-mentioned critical sentence only after five and a half months when she had arrived at Kemerovo. To tell the truth, "She evolved in her political views during the troubles of 1922 from an initial identification with the IWW partisans to an acceptance of the Rutgers reforms and the pragmatic Colony regime resulting from the new Agreement" (J.P. Morray).

(3) Mass meeting vs. technical efficiency

Soon after Rutgers arrived at Kemerovo, he raised the point at issue concerning the mass meeting — e.g., inefficiency that even the technical details had been discussed and resolved at the mass meeting — and endeavored to decide it by establishing "a certain discipline." Though the endeavor aroused opposition among the IWW partisans, Rutgers criticized the mass meeting from the viewpoint of the technical efficiency of production. His argument was backed up by an article in nothing but a local organ of the IWW: "Workers' Control," *Industrial Worker*, 1 July 1922 (reprinted in *Kuzbas*, 20 September 1922), saying that "Strictly speaking, there is no such thing as 'Democratic Control of Industry,' at least not in the sense of 'Democratic Management'"; "The IWW plan is to organize each industry....., run it efficiently..... It might.....result in some sort of dictatorship of the technician, rather than a dictatorship of the proletariat, as far as production is concerned."

The very priority of technical efficiency made Rutgers assert the following right: "We will not be able to comply with all paragraphs of law, particularly of the mining laws, if we are to introduce American methods. We take it for granted that our contract gives us the right to disregard certain formal provisions of minor laws if they conflict with good American methods and practice."

2. On the AIC-K's "adaptation" to the NEP system

(1) The rejection of the "commercial trust"

Rutgers did not strongly approve of the AIC-K's change into the ordinary "commercial trust" (in other words, "a form of Co-operative with profit sharing") under negotiations with the Soviet governing bodies, because the principle of the "Autonomous Colony" which Rutgers and others had established was that the Soviet state should guarantee its living conditions and the possibility of developing the state-owned enterprise. Nevertheless, owing to its adopting a wage system, its devolving of the right to election, etc., the AIC-K was certainly changing, compared with that of one year before.

(2) On the evaluation of the "adaptation"

L.Iu. Galkina has provided the following summary of the AIC-K, which concluded the new contract, aiming mainly at its adaptation to the NEP system, reduced the scale of its project, and achieved the single management: "The AIC-K *lived through* a period of 'excitement, romantic, and adventure.' The members of the AIC-K '*started* to work for restoration,' intending to build 'a New Pennsylvania' in Kuzbas" (*my italics*). Galkina has regarded a way to the Russification of

the Colony as a matter of course. Consequently she has failed to properly evaluate, so to speak, the labor pains of the Autonomous Colony and considered that the AIC-K "*started* to work" only after the conclusion of the new contract. She is not observant of seeking more the facts that the AIC-K was likely to deviate from the way of the Russification.

However, the original cause of the Kuzbas project was to contribute to the restoration and development of the Russia economy, and since the AIC-K could not get any positive support from Soviet governing bodies, it would be inevitable for the AIC-K to carry out some institutional changes for the economic development. In practice there would be nothing but a choice. A dream of forming a new Labor State which Rutgers had had at the beginning (according to an expression of a colonist, "a new Republic of Labor") vanished. There would be still one thing that the AIC-K aims at accelerating its economic development by increasing "the technical efficiency" of production, on the basis of "the autonomy" within the framework of its organization.

Key words: Autonomous Industrial Colony "Kuzbas," STO, Gosplan, VSNKh, NEP, American Organization Committee, IWW, W.D. Haywood, S.J. Rutgers